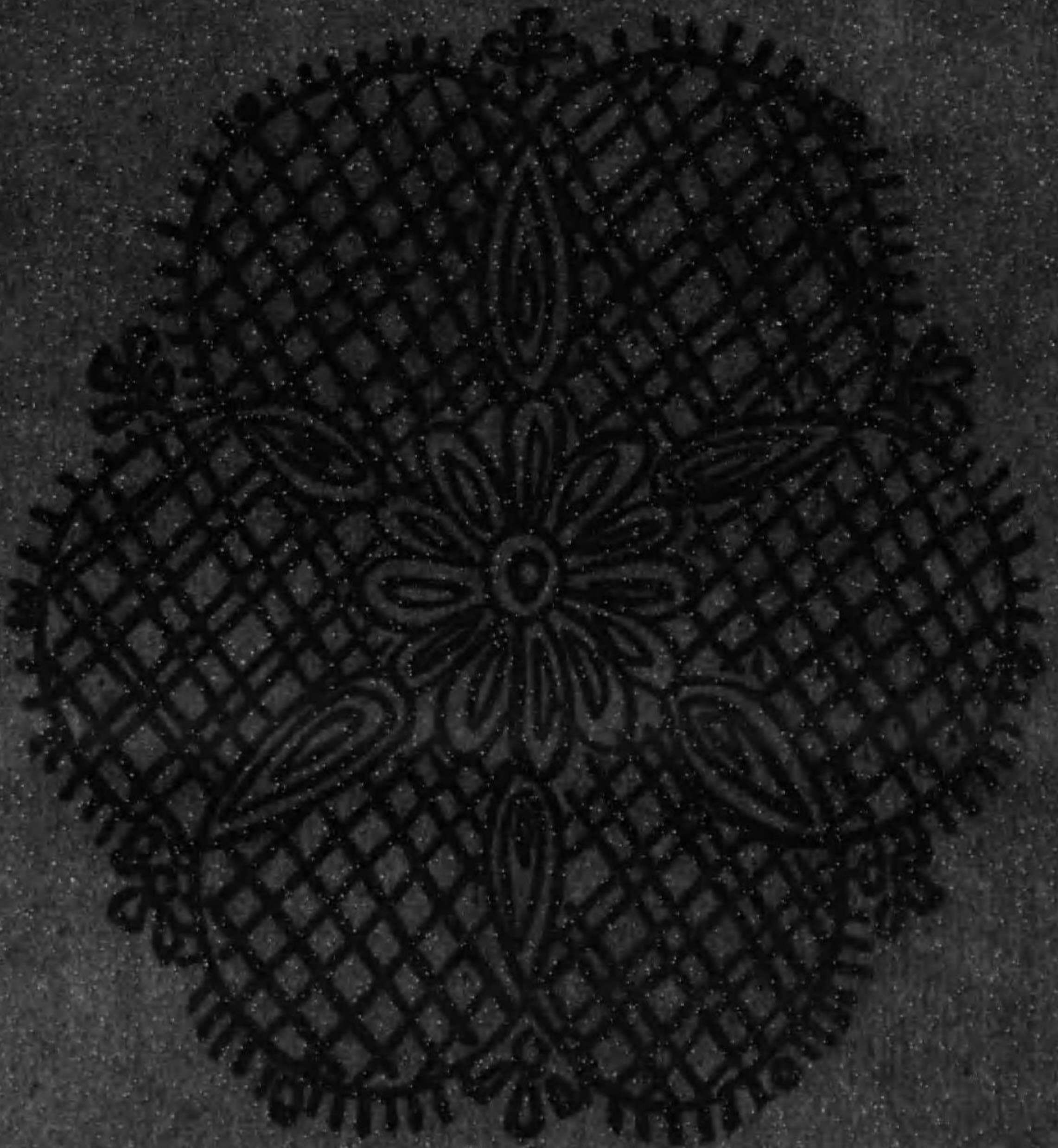


506
244



9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



506-244



悲惱の王者

寺川信著



亡き母に献ぐ

装

幀

小出檜重

曲戲
悲
惱
の
王
者

序詞

光なき闇黒の舞臺に序詞役登場

「生」といふものには誰もが欲求して

其爲には如何なる手段に訴へても
憚からず

如何なる犠牲を拂ふことも否みません、

けれども一個の「生」は他の幾百千の死によつて護られてゐることを氣付かないで
ゐます、いや氣付てゐても怖れて面をそむけてゐるのです、

それでゐて、自己の「生」を失はない爲には少しでも弱い他の「生」を掠奪すること
を平氣で敢行してゐるのです、

人間の世は斯くして太初から永劫へ、

殺し、殺さるゝ聯環で、「現在」はその争の一つの繋ぎ目に過ぎないのでせう、永遠に男と女は殺し合つてゐます、

子と親とは殺しあふことで生きて行きます、

親は自己の最も適當な殺し手としての子を生むのですから、

争闘即愛と致しますると、殺すことは生かすことかも知れません、

殺しあふことが人の世の如何にもならない事實であつて、

人間生活が凡百の象に別れてゐても

究極する處は皆「如何にもならない」ものによつかるのです、

だから「如何にもならない」ものにこそ神性が見出せるのではないでせうか、

此の「如何にもならないもの」を業縁とも、運命とも、さては神とも本能、救済

とも、何んとも呼ぶのは勝手ですが、

善人は善に、悪人は惡に徹し浸りきることによつて、この究極處に到達し、

其處に愛も憎も生も死も無差別に配合した光明天地が開けるのではないでせうか、

人間の思惟の許されない神の世界が其處に展けるのではないでせうか、

此意味で、地上は此儘で、

地獄——練獄——天堂であることを信じられると思ひます。

然かも三でなくて一なのです、……

此時舞臺正面に相争ふ幻像現はれる

お、いつまでも、いつまでも争ふてゐるな、

御覽なさい、あの相争ふ二人が、これから演じまする劇中の主要人物頻婆娑羅と阿闍世の父と子の幻影なのです、眞劍にどちらも斬り結んで居りませう、

此時、幻像の一人は他を刺すと、

幻像は全然同一人になつて、倒れる、

六
おや、おや、これは不思議、刺されたのは頻婆娑羅王でなくて、阿闍世王だったのです、いや刺した方も刺された方も阿闍世王なのでした。

舞臺もとの闇黒にかへる

芝居はこれから開演致します、

序詞役見物に禮して退場

舞臺明くなる。

時と所

釋尊在世時の中印度、(紀元前六世紀の頃)摩迦陀國の首都五舍城宮庭に於ける、頻婆娑羅王から、其子阿闍世、二代に互る出來事、摩迦陀國は當時、拘薩羅國と共に印度の二大強國として、勢威比隣を壓してゐた。

第壹幕

第壹場

宮女 數名

乳人

乳人に抱かれたる阿闍世(嬰兒)

頻婆娑羅王の宮殿の一部。

宮殿より宮殿に通ずる高廊である、手欄の彼方に廣大なる苑地で、欄に迫りて樹梢見ゆ、

宮女數名、廊の柱等の飾付けをなしてゐる所にて、幕開く。

宮女二　この高樓たかさのへの廻廊わだかまは、陛下も、どなたも、これまでに通御とおとぎになつたことではないので、何日とても御殿の飾付けには、此所らあたりだけは、省くのが例でありましたから、

宮女三　そのつもりで、其所ばかりは其儘に致して置きましたに、

宮女四　宮殿ごてんの隅から隅まで、花飾れとの御命令に、愕おどろきましてござります、これには高樓たかさのでも、萬一、御登り遊ばす、御式でもある、との儀ではござりませぬか。

宮女一　いゝえ、陛下の御心の内の限りない御喜びを現はして、石にも木にも歡びの挨拶を交したい御心から、平素つねひだりは用のない、この廊下までも、飾ることになつたのです。

宮女三　なるほど、左様でござりませうとも、陛下は如何様に御喜びで御ゐで遊すかも知れませぬなア。

宮女二　久しい間の御願望おんのぞみが獲られたのでござりますもの、

宮女三　王子様が欲しい、御世嗣が、と仰せられてゐたのも、随分、久しいこととでござりまするなア。

宮女五　四海の中の最強國、地上の最上最大の國の、主君にまします、わが陛下にも、このことばかりは、御心にまかせず、御年のみ召しますほどに、如何いかにな手段でたてでもして、とまで御望み遊した、そのはてに、あのやうな、王子様が御生れ遊したのでござりますもの、

宮女四 國中を擧げて、上も下も同じ喜びに酔へとばかり、御祝賀の式を、斯うまで大きく御催しになるのも、當然でござりますね。

宮女一 當然でござりますとも、吾々如き身分のものに致しましても、欲しい欲しいと、望んでゐたものが、手に入つたなら、飛立つやうにござりますもの、まして、今四海第一、富み榮へた、強大な國の主上でおゐで遊し、思ふてかなわぬこととともない、最上の權威者であらせられる陛下にも、意のまゝにかなわぬことの唯一つ、それも最も大切な、願がかなへられたのでござりますもの、どのやうに御祝ひ遊しても當然でござります。

宮女六 國幣を惜まず、一國を擧げての前例のない、盛大な國民と共に、祝賀の宴を張らうと遊すのも、歡びの御心はまだ十分の一程の、現れにも足りませぬわ。

宮女三 御祝の式は何日程つゞくのでせうね。

宮女一 さあ、何日位つゞきますか、隣國の王様達、その御家族をお招き遊すのにも、二三日はかゝりませう、それから群臣、國中の人々を、および遊すのですから、幾十日にも及ぶことでせう。

宮女二 それ故、踊り手といふ踊り手、音樂の名人達、國中におもとめ遊したでござりますなア、

宮女三 今日參内したやうな容色美しい舞踊手や、聲の佳い若者など、この宮殿に追々と集まつて來ることとでござりませうなア。

宮女四 都の街々は、御行列を迎へやうと、花を撒き、珠をかけつらね、香を炷いて、今日あたりから飾り立てゝゐるのでござります。この都ばかりでなく、國中は、二三日の間に、花といふ花に飾り埋めらるゝこととでござりませうよ。

宮女七 あゝ、何といふ盛んなこととでござります、芽出度いこのやうな有様を

目に見る世に、生れ合せた、私共は幸福でござりますなア。

宮女二　それにしましても、王子様が御生れ遊してしまへば、誰ももう思ひ返
しませぬが、つい半年ほど以前までの、陛下様や皇后様の御淋氣な御様子、
事毎に王子様が有つたならと、御仰せになつた頃は御添の、私共とても、胸抱
く思ひがしたではござりませぬか。

宮女一　ほんにさうでござりました、梵天四神、の一切に祈りをかけ、相師と
いふ相師は、片端から、御殿に御召になつて、占はせ遊して、熱病の人のやう
に御問ひたゞし遊されてゐたこともありましたなア、

宮女三　（聲をひそめて）でも、その相師の中には、厚う欺待もてなされた者もあつた
けれども、また、死罪に問はれたり、人を遣して、途に斬られたのもあつたさ
うにござりませぬか。

宮女四　左様なことも、あつたでござりませうよ。

宮女五　下々の者の噂によりますると、なんでも、山中で、今三年もすれば、
生れ代るとかと、申した仙人を、其場で「今すぐに生れ代れつ」とばかり、御
殺しになつたとか、今度御誕生の王子様は、その仙人の生れ代りだと申すので
ござります。

宮女一　賤しい者は何を取沙汰致すやら。

宮女五　それから、又、或る相師は、この王家は親殺しが代々に出るから、今
度の王子も父君を殺すであらう、生れぬ前からの仇だ、未生の怨を持つ者だと
申しましたとか。

宮女六　さうさう、皇后様が御着帯の頃、生血たまぢが欲しい、陛下の肩先の血を飲
みたいと御所望遊したことも、世に知れ渡つてゐて、あゝした、奇病に罹るの
は、忌ましい天罰ぢや、怖ろしい罪人を生む兆きざしだと迄、言ひ囃すのも聞き込み
ました。

宮女一　もうもう、そのやうな、怖しいことは云はぬもの、所役の人に聞えたなら、どんな殿しい罪に裁かれるかも知れませぬぞ、そればかりでなうて、歡びの日には、唯その歡びに浸つてゐやうではありませぬか。話が理に落ちました、さあ、此所の飾り付けが濟めば、あちらへ参りませうまだまだ仕事がかへてゐるのですから。

宮女一、に促されて、宮女一同各笑ひさゞめきながら退場、宮女が入つてしまふと、老ひたる乳人、嬰兒の阿闍世を抱いて登場、

乳人　どう思ふてみても、御痛はしうてなりませぬ、このやうにお健やかに、氣高うお生れ遊してゐるのに、どうしたならこの王子様を亡きものに出來やうか。貴方様は唯、此世へ息を吸ひに、來られたばかりで、ござりますなア。ほんとに闇から闇への御旅立、何も運命さだめでござります、御不運なのでござります、御兩親陛下様も、貴方様を欲しいばかりに、祈禱藥もろなまから、相占あひらと迷ひに迷ふて

御心を碎かれ、はては最初の目的を失ふ迄に、狂ふ程、このことの爲に、幾人の生命が犠牲となつたか知れませぬ、辜もない山の仙人も殺されたとか申すことにござります。それ程に遊しながら、貴方様が母君に宿られると、相師が王子様は山の仙人の化生ぢやによつて、父君に仇する御方と、申して、父君陛下や皇后様に御説勧め申したとか、それから、如何いかにな手段でもして、得やうとなされたのに、今度は、生れて來ねばよいがと、御憂慮遊して、遂うとう私に、こんな怖しい役目を仰せつけられたのでござります。おゝ、お笑ひ遊して、今この高い崖から投げ落されやうとも知らいで、おゝ、私を阿呆ぢやとお笑ひでござりませう、世の中の人間が可笑しいと、お笑いでござりますのか。御物心はつかいでも、御眼には映うつらないかとて、さあ、御永別わかれに一目御覽なされませ、一度はお繼承つぎ遊して統すくしらすこの廣大な富み榮へた國の山や野をお覽じませ、御兩親陛下をお恨み遊すのではござりませぬぞ、御兩親とても、今、御酒宴に無

理から、御心をまぎらしておゐでなされる程に、お惱みでござります。何日迄
 繰言を申してゐてもはてしがござりませぬ、さあ、御両親陛下様に御挨拶、
 それから、この市に國民に、山や川や野に……さらばでござります……

乳人、阿闍世を手欄の彼方に迂り落す、フラクと一二歩後に蹣跚めき、
 また前に進んで手欄から身を躍らして飛び下る。この間極めて短き一瞬時
 間である。遠くから見てゐたらしい、宮女走けつける。

宮女等 「王子様がお落ち遊した。」次に走せ集まつた宮女も口々に叫ぶ。

「王子様がお落ちなされた。」

「乳人殿は御申譯に自害遊したのぢや。」

「お、一大事ぢや」

左右に入亂れて走せ違ひ、宮臣侍女等次第に多く集り来る。

第 貳 場

頻 婆 娑 羅 王

王 妃、韋 提 希

須 摩 利（乳人の娘）

侍 臣、數 名

宮 女、數 名

舞踊手、伶人、各數名

頻婆娑羅王の宮殿

王は王妃韋提希と並び座し、宮殿の内部は羅網や諸種の花にて飾られ、舞
 踊の少女等は、半裸に美々しき輕羅を卷き、手足に珠玉を飾り、足にも鈴

をつけて、踊つてゐる。

王は晴れぬ表情、いくら飲んでも酔はないと云つた様子。

王妃も沈んで、額に手を支へて伏目である。

王 さあ、最つと踊れ、人間の世の喜びも、悲みも、否定する程に踊れ、シツの亂舞のやうに踊り狂ふてくれ、

奏樂は盛になつて、舞踊も急調になる。

王 (妃を見返つて) どうしたのぢや、(其心情を汲んではゐるが殊更、さあらぬ態にて) 酷う、打沈んでゐるではないか、

韋提希 少しばかり酔ふたのでござりますか、頭が痛み出したので。……

王 (軽く笑つて) は、弱いおことぢやな、別殿に退つて、憩んでもよいぞ。

韋提希 いえいえ、居辛い程のことちござりませぬ、美しい音樂や踏舞の裡に居りますと、返つて氣もまぎれるのでござりまする。

王 (言外の意を含ませて) 侍醫を呼うか。身體ばかりは、露程も油断ならぬものぢやによつてのう。

韋提希 陛下折角の御興が醒めまする、私には關はずと、御蓋を御傾けなされませ。

王 何ごとにも關わらずに居られたなら、心静かであらうな。(思入つて) いや、舞踊の者共に一曲が終れば、杯を、とらせよう。

侍臣 (踊り手に) さあ、陛下の御意ぢや、賜蓋を頂きに近う寄れ。

踊り終りて、舞踊手等は、ある距離まで近接して、禮拜の後、侍臣から賜蓋を受けて、引退る。

此間奏樂は續行してゐるものとす。

次に、一人の少女が立つて舞ふ。

侍臣 (王に) あの少女は王妃殿下の御所領の迦奢より參つて居るものでござり

ます。

韋提希 容色美しう、踊りの手振も冴えてゐるではないか。

王 名は何と申すのぢや。

侍臣 須摩利と申しまして、今年十歳、王子殿下の御乳の人の、息女にござります。

王妃 (愕きの色を我れ知らず外に見せて) おう、(と呻く様に叫ぶ)

王 おう、美しいよい娘ぢや、美しう生れただけでも、徳の一つを持つてゐるのだ、世の善悪正邪といふも、究竟は美醜といふことなのだから、のう。

韋提希 ほんに左様にござります。

王 世の憂き苦勞や、病氣老齡によつて、あの芬陀利華のやうな生々とした美しさも失はれて行くのか、憐れなものぢや、愛惜しいことぢや。

前の會話の間、少女の舞踊は續いてゐたが、此時、終末が來て、王と王妃

に禮拜する。

王 あの娘には、酒盞の代りに、寶玉を遣せよ、雪山の奥から採つた、處女の腫のやうに澄み透うた輝く珠玉を、とらせようぞ。

侍臣 (小函より取り出したる寶玉を、平伏せる少女に與ふ) お前のやうな光榮に浴したものは、今迄に無かつたのだぞ。

少女 (黙つて跪拜してゐる)

韋提希 私の所領から、參つたお前は、私の娘のやうにも思ひますぞ、それ私からも引出物しよう。(と腕環を脱して與へる)

少女 (羞耻と驚喜の極度にあつて、暖れたやうな聲で) 有難うござります。母も、どのやうに喜びますか、吃度感涙に、むせぶこととでござりませう。

韋提希 そなたの母こそ氣の毒——いや、大儀な役目をさせてある、母にはよく孝行するのですよ、この王宮から去つて、そなたの身を固めねばならぬ日も

近いことであらう、世間に出たならば悲しいことや腹立しいことも多からう、なれど、他人を恨んでくれてはならないよ、決して他を呪ふでない、その呪ひは身に返るといふものぢやによつて、のう。(思はず袖を蔽ふ)

少女 有難うござります、御言葉は決して忘れは致しませぬ。

王 他を呪ふもよいが、呪ひに自からをも喰れてはならぬぞ。

少女 はあ。――

侍臣 (王の意を承けて)退つてよい。

少女は退座する、前の舞踊手等の群に入つてしまふ。

更に新なる舞曲が初らうとする時、慌しく宮女の一人が登場。

侍座の臣下、宮女等、唯ならぬ氣配に緊張する。

宮女 (息急きながら)王子殿下が。

侍臣 王子殿下が如何遊されたか。

宮女 王子殿下が、あの望樓へのお歩廊に於かせられて御乳の人の粗忽から、

深い潭へ御墜落遊されました。

一同 (愕然として思はず叫ぶ)えゝつ。

王 (計畫が豫定の如く遂行されたのであるが、其反對のを望んでゐただけに、錯雜した感情に言葉の出ない状態に居る)

幸提希 (王に似た心境であるが、女だけに、悲痛を制しきれず泣きくづれる)

侍臣、侍女の大半は早忙と出で去り次第に騒然として来る、其間に第二の

宮女が登場。

第二の宮女 王子殿下は御無事でござりまする。

王と王妃は、更に愕然とする。

第二の宮女 王子殿下は仕合と、高い榕樹の梢に、御かゝり遊したので、御生
命は御無事でござりました、ただ御指先に、ほんの少しばかりの御傷あつた模

様に過ませぬから、全く佛天の御佑けでござります、陛下と王子殿下の御運の強い故でござりませう。

王 (復雜した二面の驚きに) おゝ、それでは早く阿闍世を、此所へつれて來よ。斯様な乳人は生きて居れば極刑に處しても飽き足りぬが。其場で無論自害したであらうな。

第二の宮女 王子殿下の御あとを追いまいらせて、潭たにに身を投げ、相果てましてござります。

此時、多勢の宮臣に護られて、阿闍世は老たる宮女に抱かれ登場。

韋提希 (本能的に抱き取つて) おゝ、阿闍世、よく助かつてくれた。

王 怖しい災厄を能くも御免かれたものだ。御前は運命に恵あづかまれてゐるのだ、一切のものに敗れない、頻婆娑羅の子だ、御前こそ、飽く迄生きて、凡てのものゝ征服者となるであらう。

韋提希 御前はどうしても私の子ぢや、この腕からは、またと再び離しはせぬぞよ。

王 毒蛇醉象も、まことの愛の前には、抗あらがはぬ、心からなる愛には、何の禍害、罪禍が竄び入らう、(自からの内心の決意を他に托して語つてゐる形)

王 さあ、今宵は阿闍世の爲の祝宴を張ることゝしやう。(先に起つて退場一同従ふ)

第貳幕

第壹場

前幕より十六年後、(釋尊成道貳拾年の頃) 同しく王舎城宮廷内、

阿闍世太子(十六歳、神經質の青年)

提婆達多(四十歳位)威容端嚴なる苦行者

宮苑の一部。

林樹深く溪流その間を縫ひ、高く宮殿の歩廊は虹の如に架つてゐる。其場所は、十六年前阿闍世王子が嬰兒たりし時、投棄されて危難を免れ、乳母だけが殉じた同じ地點である。詰り第壹幕第壹場を、下から見た心持。阿闍世太子は樹林の小徑から登場。

阿闍世太子 (近代人が持つ憂鬱な表情にて) 俺は一體、どうすれば宜いのか知ら、一切のものが不可解になつて來た、いや、何も彼もが、莫迦々々しくなつて來たのだ、何ものにも興味が持てないで、一切に望を斷つ、と云ふ如な、隱者、仙人の生活が懷しまれるのは、どうした事か、まだ俺は十六歳の青年でないか、人生に興味を失ふには早過る。だが、狩獵かに出ても一匹しか射留めない鹿が、後で三匹にも四匹にも増してゐたり、國中の女といふ女が、娼婦以上の媚態を示すのは、人としての俺にはなく、王子といふ權位にのみ眼を注いでゐるからなのだ、王子といふ境界に、人間の俺は殺されてしまつてゐるのだ。肉親の父母とさへ、隔てられて、相會ふにさへ豫め告知しなければならぬとは、林に棲む禽獸よりも、淋しい生活だ。彼等は同じ巢の中に親子同胞が、睦みあつてゐる、あゝ、それに比較して俺は不自然な生活をしてゐる、何所の國の王子も、依然俺と同じやうな日を送つてゐるのだらうか。いや、俺ばかりが

斯うなのだらう、俺のやうな呪はれた生活を享けてゐる人間は、そんなに有るわけでない。父も、母も、俺に合ふと、變に動搖して、自然でない親が子に對つて云ふものでない、阿諛に近い愛撫の言葉や、つまらない事に迄讚辭を被せたり、變に押黙つて、面をそむけたりする。殊に母は、何日でも濡れた眼でこの俺をまじまじと諦視るのだ。両親が俺に對する愛には、何か努力を要するやうにさへ見へる、幼い頃は氣付かないでゐたが、年齢と共に、俺の愛敬や思慕が拒斥されて來るのが、感じないではゐられなくなつた、考へ度くない考へや、想像したくないものを空に描くやうになつた。これは俺の方が悪いのか知れない、俺の心が拗けてゐるのだらうか、俺を取圍む策略に満ちた、虚偽虚飾の空氣に毒された反應作用からだらうか。

一切に興味を持たないのは、一切を疑ふて信じられないからだ。それだからと云つて、俺自身の手で俺の生命の緒を、裁斷つて、還境と萬人に侮蔑の宣言を送らないのは、まだ俺の心の何所かに、望を斷たないものが残つてゐるのだらうか。——

提婆達多登場

提婆達多 王子殿下、御苑内を、どれ位御探し申したか知れませんか。

阿闍世太子 さうですか、それは御氣毒でした、父王が貴僧の來られるのを好まないで、自由に出入の出來ないのは、濟まないことです。

提婆達多 いや、それも暫くのことです、父王陛下も、瞿曇の教義に、御失望なさるのも、さう遠くないことでせうから。併し耆闍崛山の方へは、毎日御通ひになつてゐますか。

阿闍世太子 ふむ、また新しい説經が初まつたとかで、此頃では政務の一切は、宰相耆婆に委任してしまつて、聞法に通ふて居られる。

提婆達多 あ、さうですか、何とか今の間に御諫止申上げるわけに參らないも

のでせうか。

阿闍世太子　それは今日迄に、幾人もが試みて、誰もが失敗してゐるので、もう奏上しやうとする者も出なくなつたのだ、その中には可成直言して、投獄され斬首された者さへあつた位だ。一寸聞くと怪訝おかしいやうだらう、宗教信者がすることでないやうで。……だが、慘酷なことを平氣で、やつてのけるのは、固い信者と稱する者共なんだよ。

提婆達多　陛下は魔酔にかゝつて御ゐでになるのです、其様のことでは、殿下が御ゐでになるとは申せ、さしも強大を誇つたこの摩迦陀國の前途も、憂慮に耐えませぬな。

阿闍世太子……………

提婆達多　私は瞿曇の教義が、あまりに狡猾で撞着矛盾を極め、詭辯に満ちて人心を昏迷せしめる、と思つたので離反し正道の正教を樹立に着手したのでし

た。彼瞿曇の説く所は、無即有であるから、一切を捨離するは一切を把握することだと説き、戒律苦行を極力否定してゐながら、傍では所謂在俗には四諦入聖道、沙門には具足戒二百數十の修行によつて、一種の戒律を高唱し、涅槃究極の境地を力説するのだから、人は歸する所に迷さゝれます、それから又、五濁三惡を拂ふの捷徑に、布施の便法を説くのは先づ宜いとして、必ずしも行乞を必要とせないと稱して精舎に安座してゐて、此を受けるのは、根本的意義が失はれてゐると、私は思ふのです、私だつて人間性の弱さは知つてゐます、だからして、瞿曇が其處に、つけ込み迎合する、遊蕩兒の遊蕩さへ辯護し得るやうな、轉換自在の優柔不斷な教説を排し、嚴正な戒律五則を提示して、漸く弛緩に傾く教團を緊縮しやうとしたのですが、彼は其を私に委さないばかりか、私の誠意を盡した提案さへ、受け容いれやうとはせなかつたのです。

阿闍世太子　瞿曇が、戒律と苦行を斥けたことは、容易に一切人を抱擁し、教

團の大を致さしめる重要な點ですよ。

提婆達多 さうです、一切の人類を抱擁し、教團の大を致すことも宜しいが、眞に絶體なるものに觸れしめず、究極處にも入らしめないで、大部分の者を生殺なましにすることは、罪なことです、一度入信すれば、一人残らず自在境に安住せしめたいのが、私の希願なのです、そこで、最初から機根の無いものは、入らしめないのが私の教旨なのです、そして、苦行によつて心身を練磨する、體驗的方法を探ることゝ致しました、だからして、「樹下石上を住居とすべし」と云ひ「糞掃衣を著くべし」といふのも、それをいふのです、併し瞿曇はこの嚴規を批評して、形式だと排し、樹下でも室内でも、糞掃衣でも美衣でも同じことと、囚れない限り如何でもよい、要はその精神にあるのだと、巧妙な疏疎ゆいそくをなしたものです、瞿曇の所説も議論としてみれば正しい整然としたものですが、實踐的方面には失敗を免れない缺點を暴露してゐるぢやありませんか。

阿闍世太子……………

提婆達多 併し、父王陛下ちんぎみが、一切を捨離せよとの教説に隨順されることから、國庫を傾け、一國財政を危あやうきに致し、人心を離れしめるやうなことがあつてはなりません。

阿闍世太子 父王は、一度思ひ起つたことは、他の進言に依つて變更したことは、今迄になかつたのだ、王者の威信にかけても行盡く所まで行かねば、承知しないのが父王の勇壯な、また一面不幸な性格なのだから仕方がない。

提婆達多 財施の間は、まだいゝですが、乞ふがまゝに盡く與へてゐたならば、物資の窮乏は目睫の間に迫つて参ります、すると其隙に乗じて、あの北方の拘薩羅國は、いくら王妃殿下の故國であるとは云へ、南下に多年耽々と虎視して居るだけに、來寇することは疑問の餘地はありません、父王陛下は其際、一戦にも及ばず國を擧げて、對手に布施さるゝとして、御自身はそれでよいでせうが、

王族貴顯の方々を初め國民は如何なるのでせうか、敵手の慘虐を恣ならしめて自から亡滅に急がれることでせうか。

阿闍世太子 (憂鬱に) そのことも考へないではないが、俺には唯默視することより他に、よい方法が見出せない。國民とはまだ直接出来ない太子の身分である上に、父母から疎隔されてゐる俺ぢや。……それでも親と國とを愛したい本能は俺にも有るから、せめてもろ共に運命の試練に委ねやうとするのだ、だが亡滅^{びやう}るにしても無意義に亡滅びたくない。喬多摩^{ゴタマ}の教團に對立する貴僧^{あまた}の集團の爲に保護もし、伽耶精舎の寄附を爲したのも、絶體信仰を其所に見出せないのだが、劃一といふものを好まない俺として、この二つの教團が互に人生究極の目的を探究し、吾々の世を少しでも善い方に導いてもらひたいからなのだ、そしてそれが俺の力で爲し得る限度のものだからなのだ。

提婆達多 信仰は理論ではありませんから、強制すべきものではないのです、だ

から御入信の如何に關せず、唯單に外護者としても、殿下の如き方を持つことは私の教團の強味です、殿下の御名と吾教團の昌運は永遠でござりませう。先日は瞿曇の衆徒五百が、遁れて私の新教團に走せ加はりました、

阿闍世太子 が、その五百の衆徒は、また元の釋迦の僧伽に呼び迎へられて、歸つて行つたと云ふではありませんか。

提婆達多 (苦笑して) 歸つてしまいました。彼の大衆が參つて三日ばかり過てからのことなのです、私が彼の群に居たころ親しくした、舍利弗、目犍連の二人が伽耶山の私の所へ訪ねて參りました、舊友ではありますが、場合が場合なので、一目見るなり、私は彼等が瞿曇の命を受けて來たことを見抜いてゐたのですが、吾教團に走せて來た大衆の眞實心と信仰力を試すのに好い機會が來たものだ、私は故意に瞿曇がするやうに、説教を途中から、舍利弗に代説せしめ僧伽梨^{さんざり}を四つ折に地上に敷いて、臥ねながら眠つたふりをしてゐたのです、す

ると、舍利弗は自分の説いてゐる辨舌や教旨に感激して酔つてしまつたのか、すぐ脇にゐる私に對する注意も忘れたのか、瞿曇の教儀の自家廣告を初めたものです、結局は煩惱即菩提生死涅槃だと、甘うまと、どんなに叱られることかと、おびえ怖れて居る衆徒を慰撫し説伏して、何のことはない、一つの檻から他の檻に豚でも追ひ込むやうな具合に、拉れて去てしまつたのです、私はこうした衆徒達には用はないですから、行くがまゝに行かしたのですが、あゝした頼りない信徒までも大切に、拉れて歸るのには呆れさゝれたのでした。話が
大變、どうも脇道にそれました、殿下、今日御伺申したのは。……

阿闍闍世太子　なんぢや、

提婆達多　殿下、殿下の御決心を、再度お勧めに參つたのです。

阿闍闍世太子　（暗い顔容にて）ふむ、決心か。現在の俺に決心も何もあつたものでない。

提婆達多　何と仰せられます、現今こそ逡巡遊す時ではありませぬぞ、國家の危急を濟ふの途は、唯一、殿下が御父陛下に代つて、登極されることです、國民もまたひそかに、一日も早く殿下の朝となることを待ち望んで居ります。
阿闍闍世太子……

提婆達多　御父陛下に於かせられても、「望む者には一切を布施せよ」との瞿曇の教法を守つておゐでになるからは、殿下が御願ひになれば必ず御位をお譲りになることをござりませう、それでも御斥になつた曉は。……

阿闍闍世太子　何と申す、非禮であるぞ。俺自身のことゝ、自國のことは俺が一等よく知つてゐる。

提婆達多　御立腹遊しましたか、では暫くその事に就いては申上ますまい、けれども今日は、此間五百の車に積運れた、殿下の有難き布施物の御返禮に申上げなければならぬものを持つて參りました。

阿闍世太子 長い前提まへおきで相手を焦らせて、価値をつり上げるやうなことをせずと早く言つたがよいではないか、さうした序曲のあるものは大抵、喜ばしくない種類のものに限つてゐる。

提婆達多 殿下を御喜ばせ申さないかも知れませぬが、また申上げずには置けない事柄なのでござります、それは御名末生怨の由縁でござります。

阿闍世太子 (不快な表情)……

提婆達多 御父陛下によつて、絶體に殿下の御耳に入れないやうに努められてあるのですが或は、もう殿下が御承知かも知れませぬが、御名の「阿闍」とは「不生」、「世」とは「怨敵」であります、詮り生れぬ前から御親子が怨敵の間柄であるといふことなのです。

阿闍世太子 なに末生怨と？ 末生怨ならば、怨を生せずとも解されるではないか。

提婆達多 左様なこぢつこぢつの氣安めは永續しないものですよ、いや、そのことは相師の言葉に過ぎないと致しましても、御指の痕を如何致します、それこそは、殿下御幼少の砌みきり、御兩親陛下が、竊かに乳人をして、殿下を高い歩廊から投げ落さしめ、人知れず亡きものにしやうと、遊されたのに、御計畫は覆つて殿下は高い樹梢に危くも一命を取止められ、乳人は殉じて相果たと聞く、その際の忘れがたない、紀念の烙印でござりますぞ、乳人が過誤まつて殿下を、お落し申したと傳へられてゐる、真相は斯うなのでござります。

阿闍世太子 (聞くに耐えぬ如く、終始、面をそむけて) それはありさうな事實だが、過傳のまゝにして置く方が、宜いことはないか。

提婆達多 御心中は御察し申上ます、なれど事實は飽迄事實で、塗つぶすわけには参りません、其場所も望樓もつみへの歩廊と聞きますれば、大方この邊あたりであつたかも知れませぬ、殿下、あの高い崖の上に、架かつてゐる歩廊を御覽ごらんじませ、あの

あたりより落ちては、如何な金鐵でも粉碎致しませう、怖ろしいことです、殿下が今日御健祥に御居で遊すことは、天の加護とより他には思はれません、殿下として、その怖い罪惡が行はれてゐた時刻には、御兩親陛下は別殿で酒齋を御催しになつてゐたのでした。

阿闍世太子　　おゝ、虚説であつてくれ。

提婆達多　　御父陛下が、業苦を怖れ、山の仙人を殺して、その化身として得た殿下が、如何なる手段ででも得たいと望まれた王子殿下が、御生れ遊すと今度は御親子の間でありながら、肉身の吾子を殺さなければ、自が殺されるものとの不安から、隙さへあらば亡ものにしやうと遊す、その業苦の惱みから、瞿曇の教法をも御求めになつたことをござりませうが、それでも、まだ、眼前に殿下の御健全に御成人遊すことが、陛下にとつては一つの脅威なのでござりませう、御母王妃殿下に於かせられても、悲惱は等しく其處にあるのでござりませう。

う。

阿闍世太子　　おゝ、俺の心臓は張裂けさうだ。

提婆達多　　例ひ肉親同胞の間であつても、自己の生命を脅すものゝ前には、自らを守る爲に、對手を踏み越へて行かねばならぬ争闘が残るばかりです。

阿闍世太子　　もう、それを云ふてくれるな。

提婆達多　　(聞入れず) 殿下、御父陛下に亡滅されてはなりませぬぞ、亡滅の前に、打勝つて、新しい回轉を、お、さうです、一日も早く、殿下の朝に遊されませ。

阿闍世太子　　御前の云つてくれたことは、俺の少年時代から胸臆に秘めてあつた、謎を解いたのだ、けれども、謎は解きほぐされても、今日から後、嘗なければならぬ苦惱に思ひ比べると、謎は謎としての神祕に封じて置くのだつた。

提婆達多 殿下、殿下だけは、あの微温的な瞿曇の論理を真似て下さいますな、私は今にあの詭辯家の瞿曇を驅逐して見せます、そして殿下が新王として、此國に君臨遊された曉は、新王、新佛、並び立つて個人と國家を、内外両面から導き進めてゆかうではありませんか、殿下近い内に——では、御免を蒙ります。

(退場)

阿闍世太子 (黙つて目禮する)よし、(ある決意を吐く如く、間、)提婆の言つたことが盡く事實でないとしても、全然虚構でもなさうだ、親といひ子といふも所詮生命の争ひに過ないで、相反嚙に終るのが此世の定理なのか、前生の吾を殺した親達は現世でも吾を亡うしのうとするのか、乳房を慕ふ其頃から今日までの十六年、氷のやうに冷たく接して俺の心を萎縮いぢぢしめ、燃ゆる血を凍結こぼちしめて、生きながら魂を寸断した、仇敵よ、兩親おやたちよ、今日はからず提婆から此言を聞くのも梵天、帝釋の御思召であらう、例ひ極重惡毒の罪によつて、この地が裂け

て、俺を呑み込もうと、もう寸刻の猶豫もならないのだ……(劍把を叩いて退場)

第 貳 場

頻婆娑羅王

阿闍世太子

番兵一

番兵二

頻婆娑羅王寢殿の外部。深夜、月はなく星のみ燦めく宮苑が前處についでゐる。

幕が開くと番兵は巡邏してゐる、番兵一、登場先の巡邏兵と黙つて交代する先の番兵が退場すると入れ違ひに、番兵二登場。

番兵二 おう——い。

番兵一 おう——い。

番兵二 また、あの時刻でないか、三つ星が東の空に下がつて、北極星が、異様に輝く此時刻でないか。今夜はまだか。

番兵一 いやまだ見ない、なんだ、おお顔へてゐるではないか。

番兵二 顔へないでなんとする。あの夜、俺一人が見ただけといふのなら、恐怖に餘まつた幻覺とも、氣のまよひとも云ふて済まされもしやうが、一昨夜も、昨夜もつゞいて同時刻には、あの怪しい姿を見ると云ふではないか。

番兵一 怖しいことちや何かの變亂の兆か、戦争と云へば國王陛下の國政も他所に、釋尊の教へに御歸依遊す、この隙を拘薩羅國や跋蹉國、さては阿槃提の列強はこの時とばかり、一時に起つことになるのかも知れぬて。

番兵二 戦亂。あゝ厭だ、戦争があつて高い位に登つたり、大金持になつたりす

るのは、上將高官の、世の中のゑらい人達ばかり、俺達下賤ものにや、負けては困るがさりとて大捷利であつても、戦争のある毎に生活が苦しくなるばかりだ。

番兵一 どの道、俺達にとつて、現世は苦みだ、それで欺かされてゐるのか知らないが、苦しまぎれに、來世をおもうやうにもなるのだ。

番兵二 釋尊はその、人の弱味につけ込むだわけだね。

番兵一 まあ、そんなものだらう。おう、そりや、彼方に、現れたぞ。

番兵二 おう、今夜も、白い雪のやうな銀とも光る衣を着た異形に、劍を携へて……、おう、今夜は此方へ近寄つて來るぞ。こりや、何とした事か。

番兵一 怖れてゐてはならぬぞ、今夜こそ、引捕へて、亡靈か魔鬼か、それとも淫がわしい宮女の忍び會ふのか、正體をきわめ、糺明さなくてはならぬのだ、御互にかくれて待てゐやう。

番共二 近寄らば怖さに腰を抜かすなよ。

番兵一 なかなか。(兩人退場。長き白絹を被づき劍を持った、阿闍世太子登場、)

阿闍世太子 (四邊を警戒しつゝ)は、能くも化け了せたものだ、奥殿の苑地に幽鬼の出現の噂は、僅三夜のうちに城中に廣がつたわ、さて、斯く豫め定めてあつた企計のやうに進涉だのも、彼夜一氣に、父王の許に迫ることが出来なかつたからぢや、だが心は、はずんで今夜こそ討つてくれんと、幾度此所迄は忍びは來るものゝ、肉親の父の名につながる奇しきおもひ、官能の愛情は、踵を元にまたしても還さすのだ、いづれは失きものと、自分の生命は投げ棄てゝはゐるものゝ、事の破れて「父」とは申せ、亡滅れることは耐へられない、今夜こそは最後だ退いてはならぬのだな、父もさるもの直にそれと察して今夜あたりは、兵を伏せてゐるかも知れぬ。

遠い精舎の鐘、夜鳥の鳴くのが時折に聞かれる、阿闍世太子は宮殿の

列柱の方に進む。

と番兵一、二、現れ、雙方黙つたまゝに争ふ、番兵等は妖怪と思ひ込んでゐるのと、太子の劍道の、秀拔である爲に、忽ちに劍を叩き落され且つ追ひまくられてしまふ。阿闍世太子は此時、初めて被ふた布を捨て扉に近寄り。

阿闍世太子 おゝ、父は安らかに眠つてゐることだらう、扉一重外には死が翼を縛つてゐるとも知らいで。間一個生長する生命を、醜き人間の手で亡し、運命の意志を枉げやうとした、冒瀆は、上天諸神の赫怒となつて、この腕に鳴つてゐるのだ。

阿闍世太子 (扉に身を凭せて叩き) 父上、父上、(答がない、語調強く) 御返事が無うても、御目にかゝります。

扉を引開くと、宮殿の内部は、仄かな燭の光に照らされて、頻婆娑羅王が

床上に座して彼方向に、禪定の默想に入れる後姿がみられる。

阿闍世太子は、これを目^み睹と、一時^{うた}撃れた如に、愕然と少時立竦む。

阿闍世太子 (劍を後方に投げ棄て) 父上、私は、弑逆の刃を磨いでゐたのでありまするぞ、今の今まで御身を害せんと謀つてゐたのであります。

太子は扉に跪く、が頻王には耳にも入らぬ如く、彼方を向いたまゝに、身動もせない。

太子は父が感動に相擁して泣けることゝ思つてゐた、その心の裏切られた失望の色に、憤然立つて。

阿闍世太子 父上、御身は怖れて御ゐでになるのですか、隙だらけな貴方の冥想禪定も、肉親の子故に、動かしたのですよ、卑怯なる父上、一國の王者たる父上が、さうした無抵抗の抵抗を敢てされるなら、私にも私として探るべき途があります。

太子は身蹴すと飛鳥の如く去る、番兵追ふ、此時冥想から靜に起つた老王は手で、番兵を制して、

頻婆娑羅王 太子を追ふてはならない、それから、今夜見たことは一切他言はならぬぞ、老王は自から扉を閉して入る。

二人の番兵は呆然としてゐる。

第 參 場

阿闍世太子 (後に阿闍世王)

大臣 雨行

同 月光

同 藏徳

同 無所畏

宰相 耆婆

物見の廷臣一

同 二

間者密使

軍司令官

將士の一人

其他、侍臣 宮女 將士

舞踊手の男女

宮廷の伶人 各大勢

前場より十餘時間後、即ち翌日の午後。

阿闍世太子の宮殿、酒宴將に更を過ぎて、懸席は醜釀されたが如に、稍狼籍となつて、列柱の露臺から前庭へかけての階段には宮廷の男女が酔ひ伏

し或は亂踏してゐる、大香爐は香煙を渦巻き昇らせて床には花が撒きちらされ、絢爛を極めた繪卷のやうな場景。阿闍世太子は露臺の中央に一段高く位置して席を占め、廷臣は半圓を劃いて侍してゐる。

阿闍世太子 (印度人特有の太い眉と鋭い眸は更に神経的に強調された表情、酒杯を手にしながら) 此頃、夜々、苑地に出現して徘徊致す、妖魔やまの正體を誰か見極めた者はあるか。

雨行 お、殿下には早や、あの風評を御耳に敏きこくも御入れ遊しましたか。

阿闍世太子 侍女等が、聞き傳へて怖びえる前まへか知つてゐる。

雨行 廣い御殿の構内のことでござりますれば、刻限を遅れての忍び遊の戻道を、人に發見けられた苦しませの、誰かの悪戯と存じまして、婢女共の取沙汰いましめを戒いましめて居りましたに。――

阿闍世太子 いや、いくら戒めて置たとて無駄なのぢや、妖魔の正體は昨夜見

極められた、云つて聞かさう——この俺のぢや。

一同「え」と愕く、

月光大臣　それは、又、殿下が如何なる理由で。

阿闍世太子　そち等が思ふやうに、容色美しい宮女のもとへ通ふたのでも無いぞ、愕くな、父の寐所へ潜入て、あはよくば母もろともに伐つてくれんずの企みから、人目をくらませてゐたのであつた。

無所畏大臣　おう、王族刹利種の出として、無道の殺逆を御謀りあるとは、賤しき旃陀羅にも劣り申す御所行。

阿闍世太子　いや、云ふな、見事に失敗してのけたわ。だが、國歩を艱難に導く父の狂信はこのまゝに見て居られぬ故、異つた手段で、力を削ぐことにした、のぢや。

藏徳大臣　それでは、強いても王位を。——

阿闍世太子　さうぢや、今日、父王は耆闍崛山より歸つたなら、彼の王座へは

再び登れぬことになつてゐる俺が手兵を派して途に伏せてあるのを、云つて置かうどうぢや誰か俺に異心あるか。

一同動搖する、が少時に止んで太子に忠誠を表す、禮拜をなす。

兩行　殿下の御旨のまゝ、でござります、私共も心竊かに君國の將來に就ては、殿下と心を等しうして居りました。群臣諸卿に於かせられても異議ありませんまい。

月光　無論のこと。

無所畏　殿下と國家の御昌運を。

藏徳　祈るばかりでござります。

阿闍世太子　皆のものが、能く俺の胸中を察してくれたことを、喜ばしく思ふぞ諸卿は國家民人の爲の支柱ぢや、協力を頼む。

月光 殿下は唯大權により御嚴命遊せば宜しきに、御依囑の御言葉痛み入りま
する、此上は各能力の限り忠勤をぬきんすることを契ひまする。

(群臣も同様の意志を表示する。)

阿闍世太子 よく云つてくれた、それにしても、昨夜のことあつたすぐ今日に、
瞿曇のもとへ、平常と變らず出向いた父は、此頃の父としては、當然とは申せ
心に落ちぬふしもある、瞿曇の教儀にまこと入信せる父ならば、抗はずして印
綬を渡す筈なれど父もさる者、俺を法敵と呼んで、瞿曇の大衆と共に逆襲し來
るかも知れぬ、瞿曇の衆徒が其舉に加はらずとも、兵を借るべき邊境も近い、
俺は今日國家興亡の最後の賭けと、この酒宴を張つたわけなのぢや。

兩行 父王陛下に於かせられては、釋尊出城當時から懇なる御問柄、また成道
後第一の壇越として、竹園精舎を獻せられた程故、眞實心の御信仰より他はな
いことをござりませう。

藏徳 王者としての御威勢からも、まことの信仰に佛の覺知、等正覺を御求め
のことゝ存じます。

阿闍世太子 さもあらう、なれど、奇襲は父王の趣味でまた得意とする所ぢや、
警備を怠つてはならぬ、父に隨はせてやつた間者が、もう第一の報告を持つて
來るであらうに……。

間者隱密の一、登場、人々を憚り太子を仰ぐ。

阿闍世太子 あ、よいぞ。

間者一 耆闍崛山の釋尊の説教は、今しがた終つたばかりでござります、御父
陛下には、とりわきて釋尊並に大弟子達と密議遊ばす御模様なく、又、隣國へ使
者を遣された氣配もなうて、出御の時と變らぬ御列にて御還御にござりまする。
阿闍世太子 あゝ、さうか、もう歸りつく時間もすぐだ、王城正門の守備はよ
いか御前は休憩して行がよい、大儀であつた、退出すれば軍司令官を此所へと

呼んでくれ。

間者一 はつ (退場)

間。軍司令官登場平伏する。

阿闍世太子 愈々大事を決行するのは、一時間後に迫つて來てゐるのだ、よいか今日の御前の使命は大きいぞ、興廢一つに御前の雙肩にかゝつてゐると云つてもいゝ位だ。抵抗するものは飽迄討ち随へよ、だが、抵抗せぬものを殺し、無益に人を傷つけるでないぞ、目的は一つだ、たゞ、父王の印綬を奪へばそれでよいのだ。俺は御前の武勇と、正義を愛する精神に信頼してゐるぞ。

兩行 拱手してこの大國の危急を見るに忍びずと、憤然遊した、殿下の悲惱の御胸中を體して、御奮闘頼みますぞ。

軍司令官 惟一言、最後の血の一滴にかけて、御下命に添ひ奉る事を契ひまする。

阿闍世太子 能く申した、凡てを頼む、行け。

軍司令官 はつ。

月光 祖國と人類の爲めに、勇ましく。――

軍司令官は、埃抄を交して退場、緊張した異様な沈黙と靜溢が漲る。

阿闍世太子 さあ皆のもの陣營を賑やかにしやうでないか。

奏樂起り美しき舞人等立つて舞ふ。物見の廷臣一登場、

物見の廷臣一 唯今、陛下の御行列の先驅と前哨との小衝突が初まつて居ります。(退場)

入れ違ひに物見の廷臣二登場。

物見の廷臣二 本部隊の開戦となりました、御父陛下は、しきりに叱咤し御命令になつてゐます。

阿闍世太子 父は勵聲してゐるのか、制禦してゐるのかな。

見物の廷臣二　あの御様子では、激勵遊してゐるとしか見へませぬ。
阿闍世太子　（黙つて暗然としてゐる）

物見廷臣二、退場、喚聲遠く聞ゆ將士の一人登場。

將士の一人　軍司令官よりの報告でござります、軍の大勢は最早、決したやうにござりますれば、大典を擧げさせられるも寸刻の後でござりまする。（退場）
更に激しき喚聲聞へ、

宰相耆婆は王冠と印綬を捧げ、軍司令官其他の將士之を護衛して登場。

軍司令官　殿下萬歲にござります、御威稜によつて、敵軍降伏、御父陛下は、地中の獄に御幽閉申してあります。

耆婆　王冠と印綬、御享け下されませ。

阿闍世太子　（兩器を手に執つて）まだ俺は運命に恵まれてゐるな。（仰いで）護もれ梵天、吾國の將來を。――

耆婆　おう、新王陛下。

兩行　阿闍世王陛下萬歲。

一同　萬歲。

耆婆　陛下、別殿にて皇后様と御同列にて朝賀を受けさせられまするやう。

阿闍世は、黙して之に答へ退場、一同歡呼新王に従ふて去る。

第參幕

第壹場

頻婆娑羅王

韋提希

獄司

獄卒

王舎城宮廷内の牢獄、前場より二十餘日後。

獄舎は暗く濕氣を含み、正面上手寄りに小窓あるにより、光が僅に射して、老たる頻婆娑羅王の居ることが辨別される。

頻婆娑羅王　あゝ俺は弱つた、軀體が衰へるにつれて、精神までも弱つてしま

つた、最初この獄舎に投せられた時は、まだ信仰が燃えてゐた、肉親の父の王位を強奪し、下獄する太子を、憎悪むよりも憐れんだものであつた。望めば譲らないこともなかつた王位を、聽法の歸途に襲ふ惡逆に對しては、怒りながらも、心の奥では憎みも恨みもしてはゐなかつた。(窓を仰ぎ、問)唯輪廻の恐しさ劫果の罪の深甚なるに感じて、あの小窓から遠く仰がる、王舎五山の中になつても、嚴しく貴い彼の耆闍崛の御山を、釋尊の巍々たる光顔と、ばかり懐しまれ、自ら地に投じて幾度、心からなる懺悔の祈をなしたかも知れぬ。(問)俺が縛に就いたあの日、耆闍崛で世尊の御説きになつたのは、今も思ひ出される、「三界は安きことなし、猶火宅の如し、衆苦充滿して甚怖畏すべし」と苦集の世の相を説かれ「汝等は吾子であり我は即ち父である」と一切を濟度ん御契をなされた「如來の室に入り如來の衣をつけ、如來の座に座せよ」と衆生の大慈悲を如來の室に、柔和忍辱の心を如來の衣、一切法の空を如來の座とも譬へて

御説きになつたのは、俺の踏み行く暗い運命の前途めくてを御教誨なされてゐたのかも知れぬ、然かるに鈍根の凡夫の淺間しさには、信解したつもりでゐて、何一つ眞に聞てはゐなかつたのだ。

頻婆娑羅王　俺に眞の信仰を持つてゐたなら、太子は俺の寐殿に窺ふことは爲なかつたであらうし、また俺の心事を疑つて王位の篡奪を、あんなに迄大仰に、唐突な計畫もせなかつたであらう。俺に徳がなかつたからだ、大法を聞てもまだ自分のものと化しきつてゐないからだ、太子が彼夜。潜入して來た時に、俺は冥想に浸りきつてゐたといふよりも、白刃の背後に迫るを知つて、見へざる絶體者に冥想祈念の形で、醜くも錠りついてゐたのだ、自我を捨離した光風境に生死を兩斷してゐたのではなかつた、思つてみると吾ながら淺間しく、能くも佩刀の柄に行かなかつたことゝ、叛信をなさなかつたのをせめても慰めにする位だ。佛世尊と年齢を等しうし、王城出離の時から縁故があるからと云

つて、増上慢をなしてゐてはならない、自分よりも後進であつても信解解脱の羅漢果を得てゐる者が少くない、これは耻ぢなければならぬことだ。日々夜々、あの耆闍崛山を仰がないでも、梵天を呼ばず、世尊の御名を稱へずとも兩師や韋提希が見舞つてくれなくとも、この間い濕めた穢臭の獄舎が、此儘に極樂淨土であらねばならぬのだ、否、さうした樂欲を思念しないで安住し得られるまでに到達しなければならぬのだ。あゝそれなのに、少しの飢渴にさへ、精神こころのともすれば亂れ勝たのは何んとしたことか。

此時、少し以前から忍んで來てゐた王妃韋提希登場、番卒は虐られたものに對する同情から無言に鐵扉を王妃の爲に開いてやる。

韋提希　陛下。

頻婆娑羅王　おゝ、韋提希、よく來てくれた、待つてゐた所ぢや。

韋提希　遅くなつて濟みませぬ。

頻婆娑羅王 遅い早いはどうでもよい、そなたが見舞つてくれるだけでも、蘇生した心持がする。監視の嚴重なのを、くゞつて来る苦勞や危険を察してゐるぞ。

韋提希 一天萬乘の國君にまします陛下が、斯うした、お苦を遊すとは、あゝなんとした世になつたのでござりませう。

頻婆娑羅王 もう、そのことは云ふな、嘆くには及ばない、俺は自からの業人であることを悔んばかりゐるのだ。

韋提希 おう、物體ないことを仰せられます、私とても業の深さは同じこと……いやや女人の身は、いや更に罪重うござりませう。日一日、この獄舎へのみちの警備は嚴重になつて、今日などは、幾度見咎られじと、廻廊の柱のひまや、扉に身を隠して、薄氷を踏む思をしたか知れませぬ。

韋提希 おう、さうであらう、當然餓死してゐるべき筈の、この俺が瘦衰へて

ゐても、二十日と生き伸びてゐること故、命數をつなく食餌を運ぶ者のあること位は氣付いてゐやうし、お前の日に一度、必ず訪らふことも、見付けられてゐるに相違いあるまい。

韋提希 阿闍世は存じてゐながら、見逃してゐるのかも知れませぬ、其處は血を分けた親と子でござりまするもの、まさかに彼の胸としても鐵や氷ばかりが張りつめてゐるとは思はれませぬ。

頻婆娑羅王 とは申せ、なまなかに見遁してゐることは、後の責苦が倍加する料にならうも知れぬ。

韋提希 さあお話よりも何よりも……食物を。

と、韋提希は冠や腕や脚の璽珞を外して酥密を、頻王に飲ましめる。

頻婆羅王 (貪り喰ひながら) おう、有難い、(悔恨の表情を暗く見せて) 毎日生死のさわの危険を冒しての、そなたの心盡は厚う思ふぞ。あゝ、それにしても四

苦解脱の法力を積んで、この餓狼のやうに貪り求める食物を何日斥け得られることだらうか。内心に恥ぢないではゐられない、そなたを待詫る心と、それを制遏る心とが恒に争つてゐる、我子阿闍世が俺を下獄せしめたのを瞑る心は薄らいでも、生命を貪るこの痴愚の自からを感傷してくれ。

韋提希　おう、陛下、何を仰せられます、陛下は何處迄も生きて下さらねばなりません、佛世尊も五濁の世の塵垢を尼連禪河に洗ひ落された後に、里の少女の獻げた乳糜によつて體力を養はれではござりませぬか、私は如何様にしても食物は生命のつなげるだけ人目にかゝらぬやうに持つて参ります、妙密を化粧にまぎらせて身體に塗ることも、かなはぬ時が来れば、一滴の漿水なりとも、私の死罪に會はぬ迄は運びます程に、生きるだけは生きて下さりませ。

頻婆娑羅王　そなたの優しい親切は有難く思ふぞ、なれど、さう聞かずとも打ち克ち難い盲目的な生の執着に襲はれ、悩みがちなのだ、日々、目連、富樓那

様達が、彼の御山から鷹隼とも、神足の疾さに訪はせて、吾に八戒を授け精神を和め慰され、また、そなたの深い情に泣かされ淨あられてゐても、飢に追つては血も肉も盡るか八萬の毒蟲、吾が腹中に騒搔るとばかり淺間ましく心は亂れ。血も肉も枯れはてるやうに苦しいのだ。

韋提希　あゝ、何とお勧め申上げてよいか解りません、私は愚痴な女の身でござりますれば、條理は如何あらうと、唯陛下が痛はしく、また、私達をこの不幸な悲しい目に會はず、阿闍世も、心からは憎めないののでござります。

頻婆娑羅王　俺達が惱むのであるとは異がつた意味で、阿闍世も惱んでゐるであらう、これ皆、業果と云ふものなのだ、人間の手には如何ともすることの出来ぬ暗い怖しい、不可知な「業」だ。あゝ、俺は、佛天最勝尊のみが知る運命の聯關を、醜い人間の手で狂わさうとしたのだ、三界の大なる調和を破らうとする佛天の冒瀆を敢てした劣弱な吾々は今、當然受けなければならぬ、罪業の苦

杯をつきつけられてゐるのだ、誰をも恨めない。……

韋提希 「三界は火宅の如し」と仰せられた、佛世尊の御言葉が、今になつて身にひし／＼とつまされます、あゝ、思も届かぬ永い前生からの因果か、存せませぬが、私は何故に、阿闍世のやうな子を持たなければならぬのでせう。(泣き伏す) どうすれば、惱苦なごみの無い國に生れるのでせう。

天上の聲 (釋尊の聲) 汝等いま知るやいなや、阿彌陀佛ここを去ること遠からず汝等まさに念をかけて、諦あきらかに彼の國を觀すべし、淨業滅せむものなり。

暗黒の獄舎は正面一部分、光明輝き天華は雨と降つて、音樂起る、と、慈顔に微笑をたゞへた釋尊の姿が顯れる、頻王も夫人も地に稽首する、釋尊一步前に進んだ時に、舞臺は元の暗さに返る、釋尊は獄卒に變つてゐる。

獄卒 さあ、もう時間は過ぎました、早く、早く、早くお退去まじを願います、

韋提希 (和悦の表情、二人にだけ通ふ思を微笑に見せて) 陛下さらばでござり

ます。

頻婆娑羅王 静かにおう、去け。

獄卒、扉口を出るなり愕然として、後につゞく韋提希を制して、

獄卒 おう、御運も盡きたのでござりませうか……

韋提希 えゝ、獄司どもにも、氣付かれたか。

獄卒 上司のものが、折悪みまわりう巡邏みまわりに参りました、最早もっとうこうなつては遁みちれる途もござりません。

獄司の聲 お、扉が開いてゐる。

獄司、慌しく登場、

獄司 居るのか、(獄卒に) 其方そちは何として扉を開けたぞ、刑罰は免れぬぞ、(暗い獄舎内を見透し、王妃の居るのを發見して愕おどろき) 大方、こんなことゝ思ふてゐた、王妃おつひさま殿下、仕方がござりません、此獄舎へは、獄司のものでも、定められた

者以外は一切、近寄ることさへならぬ嚴達があります、新王陛下に於かせられ
ては、先王入牢以來、二十日といふ日數を重ぬるに、御異常なきは、内外より
密かに飲食おんじきを運ぶべきものあるべき筈と峻嚴さびしい詮議、今日も今日とて御前に
召されての御下命がありましたからは、此儘に御見逃しまゐらすわけにもなり
ませぬ。

韋提希 (悲愁の色を見せて沈黙、併し王妃として威容は少しも壞さないで佇立
してゐる)

獄司 さあ、陛下の御座所まで御伴致しませう。

頻婆娑羅王 (永訣を豫感するものゝ如く慨然思はず聲を放つて) おう。

獄司の従者、王妃を導いて退場、

獄司 (卒に) 陛下の御命令だ、あの窓を閉じろ、

獄卒、立つて窓を閉すと室内暗く僅に獄司の従者炬火にて陰慘に照らされ

るのみ。

頻婆娑羅王 あ、俺に唯一つ残された、心の窓も閉じられたのか。(合掌)

獄司、獄卒に合圖すると、炬火を消し頻王を打倒す、老王は抵抗せず床上
に轉ぶと、獄司は劍にて老王の蹠を斬る、闇中に老王の呻きが聞こえる。

獄司の聲 覗いてならない窓から、外を望み、外との交通をなされた、獄則違
反の所刑であります。

扉の外、可成近い位置で王妃の咽び泣きが聞へて、 幕

第 貳 場

阿 闍 世 王

韋 提 希

雨行
獄司
侍臣等

前場に續く時刻、阿闍世王の宮殿

阿闍世王 (憂鬱な表情、態度、而し言語は鋭く尖つてゐる) 雨行は如何致した、早く呼べ。

侍臣 はつ。(退場)

雨行、侍臣一、等登場

侍臣一 恰度、御廊下の途中で御會ひ申しました。

雨行 陛下、遅くなつて済みませんでした、獄司をして直ちに巡察に回はしましたから間もなく、報告言上に參るでござりませう。

阿闍世王 獄中の父は、まだ壯健に居ると御前は云つたな。

雨行 はい、幾分御衰弱の模様も見えますが、御舉動、舊に變る所ないやうでござります。

阿闍世王 (凡てを知りながら、自然に訝む色を見せて) ふむ。父王を下獄したあの日から二十日にもなる、俺が命じてあるから、誰も食糧を運ぶ筈はなく、獄司以外に見舞ふものもない筈ぢやが……

雨行 (模索する如く) 左様にござります。

阿闍世王 は、人間は二十日位は絶食しても生きてゐられるものだな、有難いものだ安心なものだ、は、(無氣味に笑ふ)

獄司、韋提希、登場

獄司 獄舎巡警に參りました處、はからずも、母后陛下には、許可なく、扉を開き、内にて御會談をなされてゐることを發見致しました、かゝる場合は、何人にまれ、拉し來よとの勅命によりまして、只今此處迄御同伴申して參りました

た、職責を忘れたる不届なる獄卒は、謹慎處刑を待たしてござります。

阿闍世王　その獄卒は俺に問ふまでもない死罪ぢや。それからあの小窓は閉ぢたかな。

獄司　閉鎖し鍵かけて参りました。

阿闍世王　窓を閉されたので、父王は酷く嘆いたであらう。

獄司　御悲嘆は一通でござりませなんだ、合掌して、何ごとかを御祈りでござりました。

阿闍世王　さも、あらう、あの窓を閉されては、瞿曇の一味との交通も出来なくなるからう。併し、今迄、許容されてあつたことを想ふて喜ぶがよいのだ。そして再度と窓に匂ひ登れなく蹴を削いできたか。

獄司　御仰のまゝに施行致しました。

黙つて跪座してゐた、韋提希、此時になつて、歎歎く。

阿闍世王　母后御歎きなさるな、今更、歎いても何にもなりません、(一同に向つて)母は私自身で糺彈すから、皆のものは退つてよい。(此間に群臣は退場する、王は母后に向つて)私とあなたがたとの争は私の方の捷利に歸したのです、親子といふ名の爲に、露骨に殺し會ふことが控へられてゐたのですが、早晚、父王を敗らなければ、私は殺されるのでした。それでも、憎み憎んでゐる生命の敵であるのに、父といふ名に煩はされて、弱き心が出でて危く朝憲をみだる處でした、貴女が父の獄舎を訪はれるのも、私の内心に靄のやうに湧き起る此の弱い心の爲に今日迄は見逃してあつたのです。貴女は、それだのに何處迄、つけ上るのですか。

韋提希　もう私は何も申しませぬ、國法によつて、私の罪を問ふて下さりませ、例ひ如何なるお咎を受けやうと、私は先王、私の夫の爲に死ななければなりません、夫の爲に犯す罪科を、吾が子のそなたの裁きを受けて死ぬるなら、此上

ない幸でござります。

阿闍世王　母上、貴女は本氣にさう思つてゐるのですか、さうした嘘で恩愛の押賣をしやうとしても、私はそれを素直に買取るには少しく振てゐますよ。いや、親らしくもない貴女がたの爲に、永年の間、海底の魚の眼のやうに冷たく睨まれ通してきた爲に、心はひん曲つてしまつたのです。

韋提希　私は何も申されません、そなたは其様に仰つても、私も惱みの一生を過して参りました、私には理屈はわかりませぬが、私も先王も、そなたを幼少から愛しう思ふて育てたことは世の親と變りませぬ。お父上は、そなたが幼少の頃、少し病ひでもすると、夜の目も碌に合さぬ程なのでした。

阿闍世王　玩具に出来る間は危険がありませんから、ね。

韋提希　さう、仰るものではありません、王位とても、もつと正しい方法で、お望みなされれば譲られないことも無かつたでせうに。

阿闍世王　いや、それは能く人が後の祭になつてから取返しがつかなくなつて、初めて吐く言葉です、あゝするのでなかつた、など云つてゐながら、目前の事件に當面すると、可能るだけ狡猾く、利己的に逃避する算段を探るものです、父王に若し、本氣に讓位の意志があつたなら、青年期も將に去らうとする、十六歳の今日迄、何故手も足も出せなくして放つて置いたのです。

韋提希　そのお言葉は、そなたがあまり父王と隔つてゐたから出るのです、先王は世尊の一切の悪念を断てよとの御教に奉信してゐられます、一時はまどひに心が昏んでもまして恩愛につながるそなたこと故、決して悪意に捨て、あつたのでありますまい、私は何も解りません、せめてもの今日迄、育てられた恩愛に、父王の生命ばかりはおたすけ下さりませ。

阿闍世王　恩愛、恩愛、私はその言葉が、滑稽に、背理に聞えて笑ひたくなるのです、親の恩とは一體何ですか、同胞愛とはどうしたことをいふのですか、

親と云ひ、子といふも究竟は偶然の結果ではないのですか、貴女はこの「私」といふものを特に選んで生もうとしたのでもなく、私も貴女がたの子に、頼んで生れさせてもらつたのでもないのですよ、釋尊の言葉で云へば、罪惡の結晶なんです、性慾の變化した愛着が残つてゐるからと云つて、親子互に恩愛を強請しあつた義理があるものですか。

韋提希 お、何んとした怖しい考へを掘くやうになられたのか。

阿闍世王 貴女がたの信奉される釋尊は、愛慾を捨てよと、その親子の愛をも捨離せよとは説いて居られないのですか。(冷に微笑む)

韋提希 親と子が、互に外道に立つてゐて、理解しあへないで、呪ひ合ふとは……あゝ、私はもう、何も云はない、私を存分に裁いておくれ、死罪になりと、火刑になりと。

阿闍世王 よろしい、死罪よりも、もつと重い刑罰に處しませう。(卓上の鐸を

鳴らす、と兩行、侍臣等登場) 母を奥殿の七重の扉の内に幽閉しろ、そして、日々父王の衰へ行く、業苦に苛まれてゐる様子だけでは知らせてもよい、だが、雙方に言葉取次は決してならない。

韋提希は泣きくづれる、が侍臣獄司等に圍まれ、促されて立ち去る。

阿闍世王は見送つて退場してしまふと、ある發作の過た後のやうに、兩手で頭をかゝへ、壊づるゝやうに、よろゝと座す。間。

阿闍世王 (兩行を招きよせて) 追つて處刑の申渡をなす迄は、父王にも母后にも飢死せない程度の食物だけは祕かに運んでやれ。だが俺の命じた以上のことは決して爲るのでないぞ。

兩行 (複雑な情感に胸迫る如く) はつ(と平伏して少時頭をあげない)

第四幕

阿闍世王

優陀(病める阿闍世王の愛兒)

者婆

老侍女

侍女一

同二

侍從

前場より數十日後

幼き王子優陀は腦症にて病床に臥せしめてある、老ひたる侍女は他の侍女

達と看護に附添ふてゐる。者婆の診察を了つた所にて幕開く、

老侍女 者婆様、只今の御模様は如何でござりまするか。

者婆 朝方と變りはない。

老侍女 では、安やすと御寐やすみになつてゐても、良い方ではないのでございませぬ、

者婆 御安眠でなくて、號泣けうかる氣力が無くなられたのぢや、御指の化膿くされも昨日今日は餘程擴大してきたやうに思へる、これが、吾々臣下のものであつたら、切るなり衝つなりして、膿どろを除去とぎすることも可能できるのであるが、貴い王子の玉體に刃物を觸るなどのことは、以ての外のこと故、唯、快癒の時期を待つより外はない。佛天に委かせ參らすより吾々のはからひでは何とも致方もないのぢや。

老侍臣 大王陛下さまも此頃は、王子様の御不例ゆへ、餘程御心勞遊してゐる御様

子、御氣色晴るゝやうのこともなく、近侍の方々も、御怖れ憚つておゐでの如うでござりますなあ。

著婆 いや、陛下の胸中には、まだ其他に御心を結らす惱があるのだ。はゝゝ、皆の方々、王子殿下が御眼醒になれば、呼びに来るやう頼みますぞ、どれ、それでは後刻。(退場)

侍女一 今、著婆様が陛下の御胸の中に、王子殿下の御病氣の他に御憂患遊すことのあるやう仰せられたは、近頃、御殿や街でも、耳にする戦のことではござりますまいか。

侍女二 屹度さうに相違ひりますまい。拘薩羅國はいくら、御母后の御郷里とは申せ、今迄にもあの、母后陛下の御化粧料の屬地迦奢が取返したうて、戦をしむけて来たことは一度や二度ではありませんもの。屹度、此頃のやうに、この國の上も下もが心に煩ひを持つてゐる時を、待ちうけてゐたに相違ひござります

まい。

侍女三 どうなることとござりませう、何日まで私達は斯うして、平安に生活てゆけるのでせうか。御兩親陛下は窖の獄舎に御生活になり、陛下も御心中、恒に安らかでなうて、國中が、不安に落着かない、此頃は、敵國にとつては、再度とない攻むるに、好い時機ですものね。

侍女二 あゝ、怖しい世の中になつて参りましたなあ。

老侍女 心配しかけては限度がありませんよ、この摩迦陀國ばかりは、昔から戦つて敗れたことは、一度も無かつたのですから、案じ過すには當りません。

侍女一 古昔はさうだつたかも知れませんが、今日は、事狀がすつかり變つてゐるのですもの、王室と國民とは離ればなれにならうとしてゐる此方の斯如な不利な有様なのに、ひきかへ、彼國は今、波斯匿王の智慧と武勇に鳴り響かせ、

四方の國々を攻略つて、その餘勢で南下しやうとするのですもの、あゝ、私達の運命も、もう解れて居ります。

侍女三 戦場の慣として、敗れたなら、あの猛惡な拘薩羅の軍隊は、この首都で、どんな慘忍非道な所行をするかもしれませぬ、若者は勞役に虐使はれ、老人と病者は自然斃死か飢死をすることになり、女は處女も人妻も凌辱めに會ふて、なかには厭惡な敵兵の子を、妊孕る女も出ることになるのでせう……あゝ、いやだ、いやだ。

侍女二 思ふだけにも、ゾツとしますわ、それに、其通の事實が眼前に起つたら……。

老侍女 さういふ風に、惡く惡く、ものを考へてゐると、おしまひには、良い運命がめぐつて來た時にも、それを取逃すやうになりますよ。

侍女等 (互に顔を見交して、沈黙)

老侍女 戦のことは、起るか起らないか、まだ解らないのですし、不幸に敵が攻め來やうと、軍隊のことは軍隊に委して置けば宜しいでないか、大王陛下の御心中とても、大王陛下になつてみなければ、御心の底まで解るものでないのですよ、先の兩陛下を幽閉遊した事とても、吾々の思ひも及ばない、錯雜した譯があるかも知れません。

侍女一 それは、私共にも解つてゐることですわ、陛下様の御心持とても、唯表面からばかり見て、下々の人の風評のやうにも推はかつてゐるのではございません。

侍女二 それでも私達には……(言ひつゞけやうとする時、蹙音を聞き)おう、陛下の御出です。

侍女等、戸口に迎へる、阿闍世王は侍臣二三を隨へて登場、

王の登場と殆ど同時に優陀は眼醒めて弱き聲にて泣き立てる、一同愕いて

病臥を圍む。

阿闍世王　おう、おう、どうした、泣くのでない、泣くのでない、(病兒を覗き込んでゐた眸を放して老侍女に)泣き聲に元氣がないのう。(淋しく微笑)

老侍女　御疼痛が、餘程日數も重りましたからでござりませう。

阿闍世王、　侍醫は何と申してゐる。

老侍女　耆婆様が、今しがた奏上に參られた筈でござりまするが……御膿さびの捌は口くちが生じますまで、まだ少時は、御痛みがつづくやうに申されても、ござりました。

耆婆登場

耆婆　唯今、參殿致しますと、こちらへ御渡と承りまして、引返して參りました。

阿闍世王　おう、耆婆毎日政務多端な折に、また、斯様な世話をかけて、大儀

ぢやな。

耆婆　恐れ入り奉ります。君國の爲には身を粉に碎きましても盡すべきを、心に契ふて居ります。王子殿下、只今御診察申上りました所は、今朝と別段の變りはあらせられませぬ、御指の膿化も、口さへ開けば此處數日を出ずして御快癒と存するが、御疼が甚しいのが抵抗力弱い、いたいけな御幼體に、ちと過重すげました御模様でござります、この御衰弱恢復の方こそ、要心致して居ます。

阿闍世王は黙つて一々點頭して聽てゐたが、優陀が又泣き立つてるので思はず、病床に近寄り、病兒を抱き上げ、

阿闍世王　お、疼いか、いたいか、可愛想に、酷く寒れ、瘦細つたこととう。

老侍女　物體なうござります、王子様とは申せ、陛下御自身に御抱き遊すとは、(取らうとする)

阿闍世王　いや、よいぞ、俺に抱かせて置け。(優陀の顔を覗くやうに見てつ

らからう、つらからう、出来れば俺は御前に代つてやりたい位だ。耆婆早く治療方法は無いか、名薬は何處なる山間僻地にも人を派して求めしむればよいぞ。

耆婆 雪山の峯谷に靈草といふ靈草は求め集めてござります、人力の限りは盡してゐるのでござりますれば、早急には参らずとも、御平癒は遠からぬことゝ存じます。

阿闍世王 (優陀を無心に抱きしめて、あやしてゐる) せめて、御前の母なりと生きて居れば宜いに、のう優陀、御前の母后が居たならば、どんなに心勞をしやうぞ、婆施羅は結局、生き残つてゐないだけに、苦勞が少いといふものか(暗然として、また兒をあやす)

老侍女 (感極まつて涙聲に) 陛下がさうして御ゐで遊すと、先王陛下、そのまゝでござります、先王陛下も、陛下が御幼少の時には、左様に、一切を打忘れ

て御抱きとり遊されたこともござりました。

阿闍世王 (永い間兒の顔を見入つてから爆破したやうに叫ぶ) おう、誰か。早く獄舎に行つて、父王と母后をおつれ申して來よ。

一同聲を放つて動搖、歡喜し感激し合ふ、數人の侍臣、侍女等出入する。間。
韋提希、侍女に援けられて登場。

韋提希 (感情が言葉を壓するので、口籠る如に) 有難う、御前は、私達を許しておくれかへ、有難う、御前はやはり、やはり、私の阿闍世だ。眼覺めてくれたのだね、(床上によろめき倒れる、侍女に援けられつゝ、傍の席に就く)

阿闍世王 母上、有難う、私こそ、貴女をどれ程に見たかつたことでせう。御安心遊しませ、私の罪の贖は訖度、今後に致しますから。

此時侍臣二三名登場

阿闍世王 父王は如何致されたか。(豫感に撃れながら)

侍臣一 先王陛下は御最後に間に合ひ兼ねました。

阿闍世王 おう、

侍臣二 私共が、獄舎の扉を急いで開きますと殆ど同時に、先王陛下には、

侍臣三 敢へなく御崩れ遊しました。

阿闍世王 あゝ、遅かつたのか、父王は御自害遊したと見ゆるな。

侍臣一 さ、いづれとも判然致し兼ねますが。

阿闍世王 暗い業苦の環は、どうして、俺の一生から外れないのか。

韋提希 (悲泣する)

一同悲愁にうたれる。

第五幕

阿闍世王 (二十二三歳)

波斯匿王 (拘薩羅國王)

王女金剛 (波斯匿王の末娘にして阿闍世王正妃婆施羅の妹)

侍女

廷臣

前幕より數年後。當時摩迦陀と富強を争ふ拘薩羅國の首都、舍衛城王宮。
王女金剛の宮殿である。豪華善美なる調度、

金剛 (十七、八歳、明敏なる容姿言動)阿闍世王で、どんな男なの、姉さんが御嫁に行つた時は、私幼さかつたから、よくは知らなかつたけれど、摩迦陀國へ行くのは厭だと泣てらしたのを思ひ出すのよ。

侍女 左様でございます、婆施羅様が、御婚嫁遊す時は、随分御心に染まぬやうにござりましたね。それもさうでございます、あの時の阿闍世太子さまは、御兩親陛下から疎隔へつてられて御ゐでになつてゐました上に、荒々しい氣質の少しも優しい御心のない方とばかり傳はつてゐたのでござりましたもの、でも、御出ましになると、すぐ王子様を御喜び遊あそび遊あそびした程ですから、世間の風評うはさのやうな、唯怖こい恐こしい王様とばかりではござりますまい。

金剛 でも、御兩親陛下を牢屋に押込んだりしてゐるではないか。

侍女 それには、屹度深い理由わけがござりませうよ。

金剛 御前は大變阿闍世びいきなのね。そんなことはどうでも私は、猛獸のやうに云はれてゐる、彼の王様を一寸ばかり見してみたの。

侍女 何を仰せられます。阿闍世王は今囚虜の御身分でございます、以前は御縁家、御姉上王女ひめみぎ様の翌君つぎみに當れましても、一度ならず我國を攻め、今度は

逆襲さかされて戰敗やぶれたので、恨を抱いて生捕いけせらて來てゐられるのですもの、彼の王のことですから、何を致すか知れませぬ。

金剛 なあに、近寄つて物を言はうと云ふのでなし、遠からでも一目見てやりたいの、捕へられて來てゐても、意張り散らして、「俺は一國の王者だ」と瘦我慢を張つてゐる男の顔が見たいの。この前、あの王が都近く迄攻め寄せて來た時は、私は拘炎くわえん彌城へ遁れてゐたけれど、随分と慘忍わづらことを爲て去たいといふでないか。

侍女 身顛みぢする程怖ろしい所行を、あの王の兵士どもは致しました、その返報と云つては悪いくないですが、今度こそは彼の王舎城の外壁を打壊して、その街に放つた火で凱旋式の饗宴の御料理を調理たくたい程でござります。でも、王女様が、あの王を御覽になるのはいけませんよ。御目の汚れでござりますもの。

金剛 それは、また、どうしたわけ？

侍女 阿闍世王は外道の法敵でござります、世尊に叛逆致しました提婆達多の

肩を持つて、精舎きやうしゃを寄附したり財物を贈つたりしたばかりでなく、提婆ていばに親兵の弓勢や、乗もの、大象を貸與へて、世尊を幾度となく失きものにしやうと企らみもした、魔王でござりますから。

金剛　だから、父王ちゆうおうは殺さず幽閉して置いて、改心させて入信せしめやうと、なされてゐるのではないか。

侍女　え、大王さまの厚い御心から、比丘衆が、毎日説法に、見へますが、阿闍世王は、いつこうに聞かうともせないで、反抗の氣色ばかり示すさうにござります。

金剛　私だつて何も阿闍世王を辯護したくないけれど、牢屋に繋いで置いて、説教しても無駄と思ふわ。私なんが何故、あの王を見たいと思ふのかと云ふと、あんなに嫌きらつてゐた姉様が、御嫁に行くと、仕方なしに諦たのか如何か知らないけれど、何の不満の消息も書いて來なくなり、兩親を下獄したり、四方よめほうを攻略

たりしながら、其割に人の憎惡を買つて殺されもしてゐないから、不思議でないからなのだ。此間、軍隊が凱旋した時の行列に、あの敵國王も囚はれて、引つれられて王宮前を通ると、侍女どもが、云ひそやすので、出て見たが、あの王の姿は見へず、父王ちゆうおうの御配慮からか、阿闍世王は人に知られぬ間に、この城中の幽室に何時のまにか來てゐたではないか。

侍女　皆、陛下の御慈悲からでござります。此頃では朝夕に獄舎に近い、花園を特に散歩することまでも、御許になつてゐるさうにござります、それに、ちつとも有難とも思はないのか、監視の兵士を叱りつけてばかりゐるさうにござりますよ。

金剛　面白いわね。そんな面白い男だと思ふと餘計、見たくなるの。私、斯んな夢を見たのよ、あまり、彼の王様を見たいと思ふからか知らないけれど……私の居る室に北向の窓があるの、その窓には重い垂絹たれぎぬがおひてゐて、外部そとが見

へなくしてあるの、すると窓の外で、近くではないが、さう遠くもない所で、歌を唱ふ聲がするの、一寸と聞てみると不氣味だけれど、どうしても心がそれに引きつけられる聲なの、それで私が窓を開けて見やうとすると、怖い顔の番兵が、劍を抜いて私を脅すの、私は怖しくてならないのだけれど、どうせ一度は死ぬのだと、度胸を据へて窓を押ししたの、すると番兵は私を劍で刺したの、見ると、窓下でも、若い王子が劍で突刺さゝれて倒れてゐるの、……如何、この夢占は？

侍女 夢占は御法止でございませけれど、王女様は能く、その様な怖い夢を御覽になりますことね。

金剛 (黙つて笑つてゐる)

侍女 その御話を承りまして、私は何だか胸騒ぎがしてなりません。

金剛 御前は廻り氣の臆病ものね。(と、前庭に美しく大きな蝶の飛翔せるを見付けて) あら綺麗な蝶が飛んで來た……(と飛ぶやうに追ふて行く)

侍女 (追ひ従つて) 王女様、其方へ御いでになつては、いけません。……

二人が退場して暫く後に、阿闍世王と監視の番兵登場

番兵 こんな所迄、御歩になつては困ります、此所は、王女金剛殿下の御殿で、宮中の者でも、近づいてならぬ場所になつて居りますに……。

阿闍世王 さうか、さうとは知らずに、つい花園の花が美しいので此所迄來てしまつたのだ、獄則違反で刺殺すのも、御前の自由だ、劍は御前が持つてゐて、俺は赤手だ。(笑ふ)

番兵 私は、陛下を信じて居りますから、何も大目に見て居りました。

阿闍世王 皮肉ぢやない、俺は御前の大腹なのと、親切なのに心から喜んでゐる、波斯匿王が、俺を捕へて來て置きながら、直ちに殺しもせず、さすがに瞿曇の教を奉ずる人だけに、俺も入信せしめて救つてやらうとするのか、毎日説教僧を遣して下さる、その説教の、下らなく安價な譚觀を説くだけなのに呆れ

てゐるが、その好意だけは、厚く受けてゐるのだ。

番兵　　どうか、早く誰にも見付からない間に御引返し下さい。

阿闍世王　　よしよし、だが御前は俺を信じてくれてゐるなら、俺に最少し、美しい花を、存分に眺めさせてくれ、俺は、何日何時所刑に會ふか知れない身の上だ、地上の美しいものを見るだけのことさへ、今日限になるのか、知れないから。

番兵　　左様でございませう。……なれど……。

阿闍世王　　まあ、喧しう云はずとも、よいではないか。

此時、王女金剛登場、阿闍世王を見て愕然立竦む、一瞬間沈黙の後

金剛　　おゝ、阿闍世王、怖い恐しい、醜な王様とばかり聞いてゐた、そなたが……おゝ……。

阿闍世王　　(同じく、思はず叫んで)おゝ、何といふ美しさだ、水蓮の花のやうだ、夜天にかゝる新月のやうに優しくも、尊い王女、俺は俺自身さへ忘れてし

まひさうだ、あらゆる権力のうへ越す美だ。

金剛　　そなたを見る迄は、そなたの爲に虐を蒙つた、萬人の女性に代つて、憎みと呪を吐きかけて、嘲み返してやらうと、ばかり下心に思つてゐたに、けれど、私は唯一目でそなたの勇しい眞實の男性の美しい威嚴に撃ちすへられてしまひました。

阿闍世王　　何と仰せられます、御身の仰せられる言葉通りのことを、私も御身に申さなければなりません、わが亡き婆施羅の妹君、婆施羅が甦生つて來たといふよりも、眞實に私が待ち設けてゐたのは、御身であつたかも知れぬ、俺は戦に敗れたが、運命には敗れたのではなかつた、俺は此の境地に導かれてゐたのだつた。

金剛　　王よ、私を何處へなりと、御ともなひ下されませ。

阿闍世王　　おゝ、王女よ。

二人は何時か相抱擁する、番兵も、後れて来た侍女も制することも出来ずに居る、此時老たる波斯匿王登場

波斯匿王 (思はず口走つて) 王女よ、王女よ、狂氣したのでないか、狂氣したのでないならば、俺の寶玉は碎かれたのだ(と吾に返りて口を閉ぢる)

二人は愕然として離れ、跪拜ひざまづく、

阿闍世王 直ちに御手打の御所刑を。――

金剛 御父様、御許し下さい。

波斯匿王 (前とは全く變つた氣持、表情、言語にて) 許すも、許さぬもない、それが自然だ、天理だ、世尊の教旨に悖る、侵略の戦を起した悪夢も醒めた。御前達は俺が許さずとも、許されてゐるのだ、其儘に救済すくはれてゐるのだ、俺は何も爲し得ない、世尊を御迎して、御前に御前達の結婚を、とり行ふことにしやう、迦奢の地もこの祝賀の料に、更めて贈ものにしやう。

第六幕

第一場

提婆達多

蓮華色女尼

王宮の番兵一―二

王舎城の市民一―十

王舎城、王宮前廣場、何かの市が立つてゐるので市民は集つてゐる、午後、夕暮に近き頃、前場より數年後、

市民一 提婆達多の信者も此頃では滅切り滅つて、尊者様でなくなつたと云ふぢやないか。

市民二 そりや當り前さ、偽物は晚かれ早かれ、化けの皮の剥げるのは、前から知れてゐるわ。

市民三 その偽物を、御前は今迄、よくも信じてゐられたものだね。

市民四 信じてゐる間は偽物ぢやないよ。(笑ふ)

一同 (笑ふ)

市民二 提婆と云へば、彼奴は唯の叛反人に過ぎなかつたのさ、一教團を統率して立てる柄ぢやないね、世尊の教團が最初五人であつたのが十人となり、百人千人と數が増して勢威が加はるにつれて、嫉妬と羨望の競争心から自立した迄で、あの戒律の多い教理なんかは、一つの保護色にしか役立つてゐなかつたものさ。

市民五 いや、俺だつて提婆と同じ境遇にゐたなら、世尊に對抗して立つたかも知れないね、世尊と提婆は同じ王族の釋氏の出生だし、同じく少年の頃から

王家の男子として、羞しくないだけの學問技藝武術は教へられてゐた上に、等しく秀才として隣國の王子の群のなかでも、注目されてゐた従兄弟の間柄でなにか。自分と差したる徑庭も無い筈の他の一人が一世の人心を擧げて歸向する中心となり、渴仰の標的となつてゐるとすると、吾れ亦、起ざるべけんや、となるのが人情の常ぢやないかね。

市民七 だが、それは淺薄な人情で、身の程を知らない、自己内省を缺いたのでは發憤でなくて、空疎な野望に止るね。

市民四 自己省察といふことが、果して正しく可能だらうか。

市民八 それが可能ないで、何して他人を救濟へるのだ、一世を濟ひ、時代を指導するのは、何時でも自己が起點ぢやないかね。

市民四 一切は自己が起點だ、萬象は自己の相對的存在に過ぎぬ、といふことは誰れだつて知悉してゐるさ、だがそれは自己を確實に極むことでなくて、自

己を目標とするに過ぎないのだ、自己は畢竟、暗中摸索さ、だから自我即空無と逃避してしまふのさ、戒律や苦行で自己を強迫追求したので、肉身酷使の衰残の結果が顯れるばかりで、朦朧とした神祕説に陥入るのは、まだ良い方だ、詮り自己は捕へられるものでないのだ。だから俺の提婆に組することが出来ないのは、この苦行を強勢する點からして、さうなのだ。

市民五　それは俗世間の吾々の場合にいふことで、苟も教家として一教の法主ともあるべき人が、自己の姿さへ見据ることさへ出来ないで、どうして大衆を救済するのだ、他人は自己の延長に過ぎないとする御前の説によると、猶更必然に要求されるね。

市民六　俺にはさうした教理の事でなしに、提婆といふ人の智慧の足りなさがよく解つて来たから離脱はなれてしまつたのさ。世尊を失きものにしやうとするのに、三度も試みるとは何のことだ、一度失敗すれば、百度試みても百度とも失

敗するに決まつてゐる、事の成否は唯最初の一度で決せられるといふ理屈を知つてか、知らいでか、又は迷ひ出したからか、最初のは阿闍世王から借りた弓勢の失敗に歸して、次には醉象を世尊の道に追ひ、三度目には山頂から岩を投げ落すなんか、一度は一度と不味い拙劣な策ばかりを採つてゐる、目標を定めて射手が射ても當らないのに、いくら賢い動物だとして、酔はして出鱈目に追ふたんでは、路上で平伏する位は相手に神通力がなくても起り得ることだ、山上から下にゐる人間に石ころの一つや二つ轉ばした位で適中すると思つてゐるのは餘程、御芽出度いよ、破片の石屑が世尊の御足に當つたのなんかは、反つて奇蹟と云いたいね。それから一度、世尊の教團から奪つた、五百の大衆を、おめおめ、迎への弟子に奪還されて、袖手傍觀してゐるのも呆れさゝれたよ。

市民二　提婆が阿闍世を説いて、その援護を受けた時から俺は離れる氣になつ

たのだ、權威を否定し所有慾の一切を捨離してゐる筈の宗教者が、一國帝王を第一の檀那と推戴して伽耶に莊大な精舎を建立せしめたり、財寶の布施を過多に受けて、納り返つてゐるのは譯が解らない、背理であり矛盾だね、糞掃衣を着し、行乞を説いた、その人が斯う迄に變節するから呆れたのさ。

市民九 俺には、皆様のやうな理屈はない、唯提婆を好かなくなつたから好かないといふまでだ、阿闍世王が此頃になつて提婆を見ることを好まれないといふのも、一つには御病氣なんで、氣難しい彼男を御嫌になるのもあらうが、唯嫌になられたといふに止るのだらうよ、一體王様といふもの程、むら氣で、自分勝手なものはないんだからね。

市民一 阿闍世王の病氣といふのは、なんでも大變な熱で、晝夜とも魘され通しだといふことぢやないか。

市民七 さうかも知れないよ、親を牢屋に投げ込んで、その上に殺したりした

んだからね、それに幾度もの戦争で可成慘酷なことをやつて來てゐるから、多勢の恨みでも、さう苦まなくちや、世の中の勘定は合はないことになるよ。

市民十 提婆も算盤玉を弾き違つた方だね(笑ふ)それにしても、誰も寄せつけない此所の王宮へ、此頃感心に蓮華色尼は見舞に行くぢやないか。

市民二 感心だ、だが蓮華色尼は母后や王妃達の悲嘆を慰めに法を説きに行くのださうだ、阿闍世王は母后は勿論、戀女房の王妃金剛さへ、敵國の王女だといふ所からか、病床に近づけないさうだ、王宮内の者は全部、敵のやうに王は猜疑してゐるのださうだ。

市民三 剛快で細心な阿闍世王のことだから、病めばさうなるだらうと思つてゐた。

市民六 (彼方を伸び上つて望み)おや、噂の蓮華色尼が、やつて來るではない

か、併しあの女は何日見ても美しいね、年齢は何歳なんだらう、二十歳過たばかりに見へるかと思ふと、四十近くに見へもするのは、相等苦勞をしてゐるからなんだらう。

市民一 苦勞と云へば、あの女程苦みぬいて來た女は先づ少なからうよ。

市民四 あの女は遊女だつたといふが、一體如何した素性なんだい。

市民一 あの女はあれで、得又戸羅城の物持の家の愛娘として、育つたが、年齢ごろになつて、立派な家から躰養子を迎へたのだが、その亭主が間もなく母親に、いつついてしまつて、居耐まれないやうにされるので、生み落したばかりの子を置いて、實家を出奔したのが苦勞の振出しで、他所の市で遊女に身を墮したが、すぐと相等の商人の後妻に迎ひ入れられたのはいゝが、その商人も遠くへ行商してゐる間に、遠い市でこさへた若い情婦を拉れて歸つた、無論、他に隠してあつたのだが、あの女は嗅ぎ付けると粹にくだけて、亭主に三人

同棲を迫り、妹のやうに可愛がつてやつた、ところがある日その若い女が身上話をするのを聞くと、自分が故家に置いて出た、あの女自身の娘だつたのだ。そこであの女は何も云はずに姿をかくし、今度はこの市に現れて自棄になり、遊女の群に入つて、世尊の弟子達や提婆達多の教團の人々を誘惑したものだ。

市民六 提婆が大變、深くなつてゐたさうだね。目蓮さまだつて可成惱殺されたとか。

市民一 さうなんだ。その目蓮の導きで、僞曇彌比丘尼の處へ行つて道を修め、眞諦を得て今日のやうに、比丘尼中の神通第一と迄呼ばれるやうになつたのだ。

市民七 おや、おや、彼方から提婆が來る、王様を訪ねるつもりかしら、來ても會つてもくれず駄目だらうに。

市民九　それでも思はぬ所で、蓮華色女は會へるだけでも喜ぶだらうよ。

市民十　こいつは、面白い芝居が見られるぞ。

市民五　併し此頃の提婆は氣が氣でないだらう、教徒は滅るばかりだし、頼みとする王様は會つてくれず、猶その上に昔の情婦だつたあの女は眼と鼻の近邊に居ながら敵手に奪はれてゐて、今では全く見向もしてくれないし、市民は悉くと云いたい程彼に好意を持たないばかりでなく、冷酷に嘲笑するばかりなんだからね。

蓮華色尼登場、靜かに默禮を交して王宮の内に入る、暫の後に反對の方向から提婆達多登場、王宮の門前にて番兵に制止される、

提婆達多　私は提婆達多ぢや、御通し下され。

番兵一　貴方と承れば猶更のこと御通し申されませぬ。

番兵二　提婆様は御通するな、との命令が出て居りますから。

提婆達多　どうして、俺は通されないのだ、阿闍世王陛下は御病氣と承つてゐる、御見舞に出るのが、何故いけない。俺は陛下が太子の時代からの師友として知遇されてゐたのを、御前達は知らないからだらう。

番兵一　それはさうか知れませんが、命令は如何ともなりませぬ。

番兵二　王命でありますから、強いて御入りになるのなら(劍を擬す)

提婆達多、　それならば、せめて、俺が毎日のやうに訪ねて來たことを取次でくれ。

番兵一　それも、なりませぬ。

提婆達多　よし、いくら言つても俺の言葉を聞てくれないのならそれでは自ら出向^{でむか}までぢや。(無理に行かうとして、番兵に激しく押戻される、怒に雙方沈黙見合ふてゐる)

番兵一　ならぬと云へば何處までもならぬのだ。

番兵二 場合によりては許さぬぞ。

提婆達多 もうよい、王の心事も解かつた、蓮華色を通して俺を門内に入れぬ事状も察しられる。見よ、蓮華色尼は何ものだ、あれは盛名があつたと云ても汚れた歌うたひの娼婦であつたのをよも忘れまい、俺から目睫連に寐返打つた賣女の、脂粉の匂の消えやらぬ口から、如何な説教を聞かうとするのか。(市民の方を向つて) 阿闍世王にはもう要はない、王は見棄てとも、市民はまだ打捨てられない。(聲を改めて) さて諸君。諸君は諸君の祖國の今日の危機を黙視するのですか、一國上下は無爲安逸を貪り、邪教に迷ふて、彼の瞿曇は自から世尊と稱して、縦断したる彼が教國を建てんとするに到るかも知れませんか。諸君は之をしも座視するのでありますか。……

市民二 俺達は、もう御前の詭辯を聞く耳は持たぬ。

市民三 城壁だけは黙つて聞てゐるだらう。

市民各自が罵りながら退場、蛇使女、踊り子の類も侮蔑を與へて行過ぎる、

提婆達多 俺は去かう。

門内から蓮華色尼登場

提婆達多 (狂つたやうに) おゝ、蓮華色、昔しながらに美しい御前の顔を見ると、一切を打棄て、俺は今一度御前の胸に浸りたい。

蓮華色尼 (黙つて冷然と行過やうとする、と提婆が袖を執るので) 御離し下さい、今日の私は昔の蓮華色ではありません。

提婆達多 それでも御前の記憶から、この俺といふものゝ影は絶體に消してしまへない筈だ。

蓮華色尼 影は影です。もう貴僧あなたと御話する愛執も、責務あつたもありません、影が本體に還り得る日が参りましたなら、また御目にかゝりませう(去らうとする)

提婆達多 御前迄が、この俺を侮蔑するのか、年老いて教權の勢威が落ちたの

で、賤劣なこの市民等と同じやうに、磔をこの俺の面上に投げ付けるのか。

蓮華色尼　私は貴僧あなたを侮蔑するのでありません、唯外道の貴僧とは、異邦人であると申しただけです、異邦の言葉で語り合ふても不通で無駄なことでございます。

提婆達多　よし、この俺を棄て邪道に入り、それのみか、阿闍世王との間に柵をかまへさせたのも、御前の爲すわざであらう、吾に妨げなす者は、斯うして破碎して行くのだ（石にて忽然に蓮華色尼の腦天を強打する、蓮華色女は雙手に頭を押へ、滾るゝやうに地に倒れ伏す）

蓮華色尼　（身を起しながら）有難う提婆。生あるものは必ず死ぬのです、いまあなたの手によつて、涅槃に入ることの出来るのも、機縁と申すものでありませう。（倒れ逝いてしまふ）

提婆達多、喪心したやうに立つ。市民等走けつける間に、提婆は姿を、消

第 貳 場

阿	闍	世	王
章	提	希	
金		剛	
耆	婆		
藏	德		

してしまふ、王宮からも兵士、宮女等が馳せ寄つて、比丘尼の屍は衣をかけて王宮の内へ運ぶ、愕きと悲愁に、蕭やかな動搖を見せてゐる間に、

前場より數ヶ月後。

阿闍世王の病臥せる宮殿の内部。病床近く侍してゐるのは老臣耆婆一人き

りである。

幕が開くと扉に人の氣配がするので、耆婆は立つて行き、次に王の病床に歩寄つて、

耆婆

陛下、大臣藏徳が御見舞に參伺致しました。

王は黙したる儘に通せと命ずる、

耆婆、扉を開く、藏徳登場、

藏徳

陛下、御氣色は如何でござります、

阿闍世王

毎日毎日、熱に浮かされ、瘡の悪臭に吾ながら耐へきれないでゐる、これ、このやうに、顔も身體も衰弱してしまふたぞ。(肱を出してみせる)

藏徳

畏れ多いこととござります。なれど、天下の名醫耆婆殿が側近に侍して居られるのですから、御快癒も遠からぬこととござりませう。

阿闍世王

耆婆の居る前だが、この病は治るか治らないか當になるものでない、

俺は近頃、斯う病込んで臥てばかりゐるやうになつて、いろいろのことを考へるやうになつた。人間には誰も生きて行くのに、如何ともすることが出来ない、暗い塊のやうなものを持ち運ばされてゐるのだ。どんなに厄病にかゝりたくないかと豫防しても、懼るときはかゝるのだ。名譽、權勢、富貴もさうだ、計畫や條理のまゝに凡ては獲られるものでないやうだ、人間の意志や願望では何一つ左右出来ないことになつてゐる、生死と同じに、どうにもならないものを背負されて生れてゐるやうだ。父王が人殺を敢てしてまで得た子であるのに、その俺を生れると同時に呪ひ殺さうとし、また死ぬまで疎隔し通して來たことも、俺が肉親の父を牢死せしめるに到つたのも、つまりこの暗い「業苦」の塊を持ち運ぶことに外ならなかつたと思ふのだ。

藏徳　陛下、それは波浮陀迦旃延の教説を御採になつた御考へではござりませぬか。

阿闍世王　いやいや、無因自然の説教も背理ではないが、俺にはそれだけでは物足りない、この暗い塊を少しも解説してくれないからだ、俺の云ふのは、善因必ずしも善果となつて顯れず、悪因が悪果に見舞はれると限つたわけではなくそれでゐて、不可知、不可測に聯續して働きかけるものことなのだ。俺は父王に一生親しめなかつた、それだとして憎み通しであつたわけでもない、肉親の子としての愛情の湧く時もあつたのだ、それでゐて父殺しの重罪を冒してしまつたのだ、俺は今、その焦きつくやうな悔恨に自から責められてゐる、高熱にうかされては、よく父王の幽鬼と諍ふ^{いさか}言もいふらしい、醒めてゐては其愚を笑ひもするが、これも理屈ばかりでは自分の心から拭ひ消せないものがあるのだ。業報を否定する富蘭那迦葉の説も月稱が傳へてくれた、未來も神も否定して現在生活をのみ強調すると聞く、末迦梨拘舍梨の説も間違つてゐないだらう、死によつて一切の解決を求める阿夷陀翅舍飲奄羅の徒も、神祕の蔭に遠

難するサアンジャヤベラツトヒプトも、それぞれに耳傾くるものがあるが、その何れもが、俺の胸にびたりと迫つて、一味の清涼を覺へさしてくれないのだ。

藏徳　陛下、私如きものが申上げるのも如何かと存じますが、陛下は知見に煩されて御ゐでになつてゐるのではござりませぬか、そして王者としての御自身、一世の英主、統領にまします陛下御自身が、あまりに謙讓で御ゐでになるからではないでせうか、私は犠牲といふものを否定致しません、一個偉大な存在の爲に、卑少な衆多が犠牲となることは、當然であり、それは決して亡^{はろ}びでなくて、榮譽ある新しい甦生だと考へて居ります。出家僧迦の具足戒が、一切人の生活方途でござりません、蟲類の生成する夏野に行くことすら憚りて、精舎に安居するのは、出家沙門の生活には自然でありませう、なれど王者の道は全く異つたものなのです、迦羅虫が母胎を喰ひ破つて生れ出ると同じ如なものでないかと思ひます、亡き先王陛下は更に雄偉な、陛下の内に化生されてゐる

ことゝ思ふのでござります、されば、それに関^{かゝ}る御苦惱御悔悟は無^む要^{よう}の業^{わざ}ではないかと存じます。

阿闍世王 (病的に)御前は伶俐者だ、外交官だけあつて、この俺さへその巧妙な論理と雄辯に負かされてしまひさうだ、だが現^{いま}今の俺は、もうさうした阿諛を黙つて聞流すだけの、心の餘裕がなくなつてゐる、(素氣なく)御前は退出するがよい。

藏徳悄然となる、耆婆、氣毒さうに眼で退出せよと知らすので禮して去る。

阿闍世王 誰も彼も心事の陋劣なものには呆れたものだ、病氣しても俺は人間でなく、王者として奸佞の徒には偶像視されてゐなければならぬのか、あゝ、頭が痛む。……

耆婆 暫く、御寐遊^{おみすま}しては如何でござります。

王の背後に支へてあつた布團如のものを除き、起してゐた半身を抱き臥かす、

阿闍世王 (昏睡状態に入り)あゝ、苦しい、身體中が、ずたずたに切刻まれるやうだ、頭は鋸で挽かれるやうだ。(間、意識を全く失つてしまつて)おう、父の姿を借り来るは何奴なるぞ——魔神よ退れ。——射よ射よ、弓勢は何をしてゐる——おう熱い、お父上、何とて、斯様に火などを吹きかけられますぞ……おう、何といふ物愴い御行相、……おう、熱い、御恨御怒は御尤にござりまする、お……お……お……

此間に母后韋提希、王妃金剛登場、

忍ぶやうに病牀に近寄り様子を見る。

韋提希 耆婆どの、御苦勞にござります、陛下はそなたより他の誰もを、御信じなさらないので、附ききりの御看護は察します。

耆婆 おう、有難い御言葉いづもながら痛み入ります。

金剛 私が御側についてゐて、御看護^{おみと}出来るのであつたなら(悲嘆に思ひ沈み)

あゝ、何も、申しますまい。耆婆どの、そなたばかりに御苦勞かけて濟ませぬ。

耆婆 何を仰せられます、先王陛下から二代に亙つての、厚い御恩寵に比べますれば、何程のことでもござりませぬ。(王の方を見て)何とも御痛しいことにござります、あゝなられては、唯手を束かねて御熱の下るのを見てゐるしか仕方がないので、私も同様に、毎日心熱に焦かるゝやうに思ひます。

韋提希 さうした辛さもあらうなれど、そなたは一日中、側近くに居るから、御氣色の和らいだ時も見られやう、少しは心のおちる時もあらうが、私は唯一人の母親でありながら、子に信せられず、醒めてゐては近寄ることさへ許されぬは、何とも情ないことではないか。のう、金剛、そなたとても。……

金剛 えゝ、妻が夫に疑はれ、それも、生れが唯、多年戰場に、まみえた隣國の王女と、いふばかりで、遠離られ、どのやうに御身上を案じまいらせたとして、こうした熱に御正氣ない時ばかり、御顔を僅に見まいらせたとして、それが

なんで相會ふ心地がせられませう。

耆婆 御母后、王妃殿下、御心中は重々御察し申して居ります。今暫くの御辛抱でござります、陛下の御心が回轉されるのも、さう遠からぬことゝ思つて居ります。

韋提希、何か言はうとして、阿闍世王の讒語に愕然となり三人沈黙。
何れも王を不安氣に見まもる。

阿闍世王 (夢中に物愴い聲に叫ぶ)御前は親を捨て、俺と共に走つた、……お前は間者であるまいな、それとも策略からか、……お前は人質でないぞ、俺の王妃でないか。——金剛、俺は悪かつた、お前を疑つてゐるかつた、私はあなたの子です、母上、あなたはそれに、それに、あゝ怖しい、なせそのやうに恨めしい顔して、私を睨むのです。なに、火を吹きかけるか、あなたも仇だ、父も仇だ。金剛、お前は俺を毒殺する機會を待つてゐるのであらう。あゝ苦しい、熱い、

あゝ……あ……

韋提希、金剛、おろおろとなつてゐる、耆婆も病床に近寄つて無益に王の身體を撫でたりしてゐる。間。その間に王は次第に意識を回復して来る。

耆婆 陛下、御鎮靜まり遊しましたか。

韋提希、金剛、歎歎つゝ急ぎ退場せんとするのを、阿闍世王は手真似で止め、

阿闍世王 去すともよい。ゆかずともよい。(兩人、不安氣に止るのを見て)母后、どうか暫く行かないでゐて下さい。金剛もゆかないでゐてくれ。

韋提希 お、私が此處にゐることを許して下さいさるのかへ。

阿闍世王 私は、永い間、あなたを疑つてゐました、信じきれず疑つてばかりゐながら、やはり、無關心でゐられなかつたのは、愛してゐないつもりでゐて、愛してゐたのでせう、やはり子としての私は世間並に親を慕ふやうな氣持に貴女を思はないこともなかつたのです、私の持つて生れた、何ものをも信じ

まいとする、變な心、どうにも出来ない業報とでもいふものゝ爲か、私は全く孤獨に、とり残されてしまつたのです。私は何云つていゝか解らない、たゞ御赦を願ふばかりです、憐んで下さい。

韋提希 お、何と仰せられます、私こそ憐んで下さいませ、愚痴な女の身で、夫とは死別れ、たゞ一人の實子から、隔られてゐたことは、どんなに耐へられなかつたか、けれども、私達のなした過去の惡業を思ふて、泣きの涙で耐へられないのに耐へやうとしてゐました、あゝ、能う御赦して下さいました。(涕泣く)

阿闍世王 (泣いてゐる金剛に)御前にも、病氣以來、随分つらく當つて濟まなかつた、赦してくれ、だが御前の父、波斯匿王ばかり油斷のならない、術策に長じた人はないからだ、御前はいくら確りとしてゐても女だ、殊に心の優しい女だ、それだけに御前を隔てないではゐられなかつたのだ。

金剛 有難うございます、私こそ如何やうに疑はれやうと、どんな境遇に置か

れても、陛下を思ふて思ひ死に死ぬのであります、御赦下さいませ。

阿闍世王　金剛、よく云つてくれた。(母后に)母后、貴女は眞實に私を救ますか、心の片一方では今も私を恨んでゐるでせう。

韋提希　またしても、そなたは其れを云ひ出して私を苦しめるのですね。私は何もかも思ひ出さないで、そなたの御惱の一日も早く快くなられることばかりを念じてゐます。

阿闍世王　眞實に、私のことばかりを思つてゐて下さいますか。(稍險阻な表情になる)

韋提希　え、そりや、先王陛下の御事も思ひ出さないではありません、思ひ出せば辛さ悲しさで一杯になります、生きてゐるのにも耐へられなくなります、それでも「時」といふものは、私の一生懸命の努力を援けて、此頃やうやう、その痛手を癒してくれました、過ぎ去つたことを想はないで今日のこと、現在の

ことをのみ、見詰めて生きられるやうになりました、それにまた、そなたは何んと申しても吾が子です、そなたを以前に恨んだ心は、今は吾が子として愛惜む心の方に、蔽ひ包まれてしまいました。世間普通の母親の心になりました。

阿闍世王　(獨白のやうに)私と貴方とは生れるとから、復讐の仕合をして來たのです、私の嬰兒の時に殺されやうとして殺されなかつたのは、私の復讐でした、父王や母后を牢獄に幽閉めまいらせられた時の、無抵抗の抵抗は貴方がたの復讐だつたのでせう、貴方がたが瞿曇の教を信奉されると、私は提婆を援けました、吾が子の優陀の愛に愕き醒めて、獄舎から救出さうとする時に父王の崩御されてゐたのは手痛い皮肉な私への復讐だつたのです、貴女が、内に相争ふ二つの心を包みながら、私を愛さうとする心のみを見せて、私に親しみ近しもうとして來られるのも、私には、内心にそぐわないものがあつて、健康な時分は眼を閉ぢても過してゐたが、こうして心身が弱つて來るとその不快や不満に耐

へきれなくなつて、貴女を餘計に信じきれなくしたので、云はば私自身の罪業は、最後に私へ復讐しかけて來たのでした。(間)戦場で私は大勢の人間を殺し不具者にもした、私を恨み呪ふものは敵國ばかりでなく、此國にも少くないであらう、提婆達多を援けたので瞿曇の一派は私を法敵視してゐやう、提婆とても現今では、私があまり力を入れなくなつて、本氣に信仰もなにもしてゐないのを知ると、俺を怨み呪つてゐるだらう、天下の人間が盡く、この俺一人に呪ひかかればよいのだ。(病的に昂奮して來る)

耆婆 陛下、なるべく御精神を昂さないやうに遊ませ。

侍女の一人、藥湯を捧げて登場、耆婆、受取つて、別の器に少量、移して一口飲んでみて、王に進める。王は凝つと見てゐる。

阿闍世王 金剛も母後の御供して退つたがよいぞ。

金剛 (差俯伏き)はい、

韋提希 御言葉返すやうでございしますが、部室へさがれば、陛下を見ないその間は心配な想像ばかりが湧き起つて、こゝろもそらになるのでござりますから、御許し下さつて、此所に暫くゐたうございます。

阿闍世王 なりません。(不快な表情)

韋提希は撃たれたやうに、金剛と相見返り、

韋提希 それでは、御安靜にゐらせられませ。

金剛 (眸で仰ぎ見て)陛下。

母后、王妃退場。王は黙つて目送する、兩人退場暫くして、

阿闍世王 俺は、やはり孤獨なのだ、俺は病苦に悩み疲れて、内心が弱るにつけて、外部では無理に内とは反對に、冷酷に、粗暴に装ふのはなんとしたことか、母后よ、妃よ、赦してくれ。破倫不徳の範を示す父親殺しの國王を上に向く、臣下や國民こそ、よい迷惑だ、この二三年來不作の飢饉がつゞくのも、人

心が悪化したからだ、俺の無道な所行と、國政の弛緩からだ。(永き間)優陀は如何した、今日はまだ見ないでないか、

耆婆 太子殿下は、先程藏徳の參伺致しました、少し前に、陛下が御寢になつてゐる間に御見舞なされました。

阿闍世王 あゝ、さうか、それでは、もう今日は規定の時間が過たから來ないのだな、瘡毒の感染を怖れて、隔られれば隔られてゐる、優陀の氣もはかられぬ、俺が、俺の父を信じ愛さなかつたやうな心が、幼ない優陀にも……おう、なんとといふ怖しい業報か……そんな莫迦なことがあるものか、

耆婆 (王が昏睡に入るのを止めるやうに叫ぶ)陛下、陛下。

阿闍世王 (制止を耳に入れず、半ば獨白に)俺は大海原のどちらを見ても浪と天ばかりの最唯半の小島に、難破した船から唯一人生き残た人間のやうだ。夜も晝も、俺を吞もうとする怒濤に圍まれ、自分の心臓の鼓動だけを聞て、見込

もない救助艇を待つて、自殺も敢行し得ないでゐる者のやうだ、俺には嬰兒が取籠る乳房のやうなものがない、鳥や獸物は森や林の温い巢があるが、俺にはそれが無い、愛することも、愛されることも出來ぬ俺なら、酔ひ痴でもしたいが、酒は俺の魂を奪ひはしないし、女にも俺は溺れ込めない、俺を覗ひ殺さうとする者は、この王宮にさへゐるであらうが、それとて俺に睨まへられて萎縮してしまふ程のもので張合ある敵手でない、策を弄すれば、弄した自身が動きがとれなくなつてゐたりして、それも俺の敵手ではない、あゝ敵でもよい現れて來い、勇敢に一徹に、俺にうちかゝつて來る敵なら、それは敵でなくて味方だ、俺を生かしてくれる救ひ手だ、(間)俺は、何れの道からしても、救はれない見放されてゐる人間なのか、何も彼も投げ棄てたい、一切を拂拭した澄切つた大空のやうな心境になりたい、その價には王冠もこの領土も、妻も子も、俺自身も捧げてよい。……

耆婆 陛下、陛下。

阿闍世王 (漸く覺めたやうに、苦しい吐息をつく) 心配するな。

耆婆 陛下、おそれながら、その御心、その御悶へは、ただちに救濟への捷路でござります、陛下は今、御救に御會ひになります。

阿闍世王 御前は老人だけに、俺を劬つてくれるのか、だか俺の眞實の病氣を治療す醫家はこの地上にはゐないのだ、身外の瘡の病毒ばかりでなしに、内心の苦患から癒してくれる良醫は、生きてはゐないだらう、梵天帝釋さへ信じない俺に、なんで救ひが來やうか、援かる見込のない永遠の惱苦と孤寂さばかりがあるのみだ、俺は今日迄の過去の所行を怖しく思ひ出されて慙愧らるゝばかりなのだ。

耆婆 その慙愧の御心こそ、無上の大醫の法藥を得て、内外の病苦を除かるゝ導因でござります、陛下は佛世尊に御會ひなされませ、世尊は一切を知見し、

一切人の諸根、心性を知解されて大慈大悲の憐憫を、時に臨み人に應じて離脱救濟の法を御説きになつてゐます。世尊は唯の醫家と見奉つても、釋提桓因の癩病を御治しになり、恒河の水を火と見る餓鬼を御救ひになり、また波羅奈城の長者の子で、その母と通じて父を殺し精舎を焼いた極重惡人、阿逸多の如き者でも、その罪から救ひとらせて、比丘の一人に御加へになつてゐます、陛下も御承知の、あの蓮華色尼も、もとは不幸な悲しい一生を淫蕩に投げ込んでゐたのでありましたが、佛智を得ては、神通第一の比丘尼となつて居られるではありませんか。六師の諸説も陛下を動かし奉らぬのは道理でござります、陛下、唯速かに私の言を御用ひあつて、如來世尊の所へ、御越なされませ。

阿闍世王 御前のその言葉は眞實だらう、だが他人が救濟はれたからとて、俺が同じに救はれると限つたわけのものでない、九十九度の例が、百度目に當嵌らないことも無いではない、俺はさうした清淨な群に入ることは、不可能だら

う、俺の極重惡の業縁は、阿鼻地獄に墮して、盡くるなきの苦患を生きながら受けるに相當してゐよう。考へても耐らない、あゝ、どうすればよい。――

此時、王の枕邊近く頻婆娑羅王の亡靈現はる、王は愕然自失して凝視してゐる、亡靈の姿も聲も、王にのみ、見へ聞へてゐるものとする。

阿闍世王　お、父上、何とて、此所へ。――日夜、夢に入つては責め苛み、猶飽かでもか、其上に異形を現し見せ給ふは、如何なる御恨晴さうとてか？

亡靈　恨みとな？　閻浮提を離れて住める、我身の今に、何んで怨恨が遺つてゐやうぞ、阿闍世よ、生きて我身が苦惱だと同じに苦惱んでゐる。

阿闍世王　おう、

亡靈　そなたの苦惱は、我身の苦惱ぢや、その苦惱を除きたい、いや除てくれ。

阿闍世王　おう、父王、

亡靈　痛ましや、それは斷ちがたき業縁、遁れ出づべくもない繫縛ぢや。如來

に聞け、如來世尊は業苦繫縛その儘に、遁がれ難き運命をその儘に、轉生離脱の救済を御説きになるであらう、耆婆の説く所は眞實ぢや如來への導きぢや。

阿闍世王　お……おう、

亡靈　かく申すも、生死境を異にするも、そなたの愛に曳かれては一處に住するが故ぢや、愛すればこそ呪ふたのだ、娑婆の呪咀恨恨こそ、離れがたなき、まことの愛であつたのだ。自から疑うな、自からを呪ふな裁くな。たゞ信せよ信じて耆婆と共に行け。(消へ失せる)

阿闍世王　父王、父王、斯くまでに私を思召し下さるのに、私は、私は、何んとした業人か、おう、御ゆるし下さいませ。(稽首するやうにして昏倒してしまふ)

耆婆　(亡靈は見へないので、王の所作や嘆聲を嚙語として不安氣に見守つてゐたが、この時、周章して抱き起し)陛下、陛下、どう遊しました、御父王陛下

下も、どなたもおろでにはなりません、御氣を確におもちなされませ。

一三六

第 参 場

阿 闍 世 王

耆 婆

王の従者 男女大勢

釋 尊

大迦葉其他の佛弟子大勢

前場より數日後

耆婆の莊苑の菴婆園、釋尊と其大衆の夏安居せる精舎近き森林中の道、月光水銀の如く照り溢れた眞夏の夜、開幕少時にして、病める阿闍世王は寶

象に乗り、侍臣宮女等従ひて登場、

耆婆は王を象轎より援け下して、菴沒羅樹の巨木の蔭に憩はしめる。

耆婆 御氣分は如何にあらせられまして、

阿闍世王 (黙つてゐる)

耆婆 御疲勞遊つかれされたことをござりませう、もう此所迄参りますれば、精舎からも迎がまいりますから、暫く御休憩遊つかれしませ。

阿闍世王 (黙つてゐる)

耆婆 御熱の潮さす氣配もござりませぬが、御氣色すぐれませぬは、如何遊ばされたのでござりまするか、

阿闍世王 (沈黙)

耆婆 陛下。

阿闍世王 氣分はよい。久方振りに夏の夜の涼しい外氣に觸れたので、心身と

一三七

もに爽さわやかぢや、(不安氣に見廻して)なれど、この森は深いせい、か人間の世とも思はれぬ静寂しじつけさではないか、千二百五十人に餘ると聞く大衆は、何處に居らるゝのぢや。

耆婆　は、大衆は只今、世尊を圍みまゐらせて、三昧に入つて居られるのでございませう。

阿闍世王　(思入つた如く)耆婆、お前は、よく俺を法敵と見て、奸計を以て、敵中に誘おびき陥おしたのではあるまいな。

耆婆　陛下、何んと仰せられます、あの天そらにかゝれる月のやうな、明かにまどかな、御心を以つて、世尊は陛下を御迎へなされるでござりませう。

阿闍世王　いや、俺は其反對に、今大地が二つに裂けて阿鼻地獄に、墮おさるゝのが當然なのかと思ふのだ。

耆婆　御自身から御裁き遊あそびますな、人間の心で他ひとも自分も裁かれませぬ、凡

ては如來佛天の御心のまゝでござります、運命の意志に隨從しなくてはなりません、自から責むることも、おもねることも自然の大法に外れて居ります、人間の限られた心こころで、はからつてはなりません。世尊は七人の子を持つ親が、何れにも分け隔ては無うても、殊に病弱なものに心が惹かるゝ如うに、罪障深く生くるものにこそ、餘計いづに慈いつくしみを、御かけ下さることでござりませう。

阿闍世王　果してさうだらうか、大海の死屍を宿さず、鴛鴦かひやの團圓かに棲すまぬと等しく、清淨な人々の間に、俺の如き極重悪人は入つて行けぬ、まして、世尊は「猛獸毒火に近づくとも、重悪の人には接近せじ」と仰せられたと聞てゐる。

耆婆　陛下、さればこそ、如來世尊は悪人を御救ひとらせられるのでござりませう、いや人の世に呼んで悪人とするものは、何處まで悪人でありますやう。

阿闍世王　俺は今迄、一切のものに怖れを抱いたことはなかつた、それなのに、今は王者としての威嚴も、自恃たのみも失くなつた、俺は、唯怯おびえおのゝいてゐるの

だ。

耆婆 それは慚愧の御心からでござりませう、それこそ、真に佛の善法に遷つた救済への徑でござります、(間)世尊に於かせられても、陛下の御胸を推知して、御迎への爲に、月愛三昧に入つてゐられるのでござります。

阿闍世王 月愛三昧と？ それは如何なる禪定をいふのか。

耆婆 それは、あの天中天に放つ光明の、あの限界のない、非熱非冷、非常非滅、非色非無色にして、その光の及ぶ處、煩惱を滅せないこととははない、月光に倣ふ三昧境に入り、陛下の爲に祈つて居らるゝのでござります。

阿闍世王 無限廣大な慈光、あの月の光に吾が身内の貪惱熱苦は、洗き落されたやうな心地がせられる、あゝ、あの月光の愛を持たせられる世尊に、濁惡の俺が迎へられるといふのか、……あゝ。……

耆婆 (遠くを望み)お、陛下、世尊は此方へ御迎に御いでになります。

阿闍世王 (同じ方向に伸び上り)世尊が、おゝ俺は唯懼れる、身内がおのゝいてならぬ。

耆婆 陛下、御心安らかに御力で遊しませ。

釋尊及其弟子達登場。釋尊は白毫の光を放つの威神、王も其從者も、うたれて拜跪する、

釋尊 大王よ。

阿闍世王 (感激に溢れて)世尊(永き間)私は痴患に心冥く、五欲に迷されて正法の父王を弑殺致した程の者にござります。(身を釋尊の足下に投げる)慙みを御かけ下さい。どうかこの惱苦から御救済ひ下されませ。

釋尊 大王よ。御身の來られるのを待つてゐた、おう、まことの佛弟子よ、その惱苦こそ救済ぢや。

阿闍世王 世尊よ。それは？……

釋尊　おう、梵天帝釋、四天の子である一切、現象世界の凡てに、善悪があらうか、對立があらうか、故に佛天の救済がなくて如何しやう、いや、救済さへ要とせぬではないか。一切は無だ、萬象は實在だ。自我も無ければ對境も空、無なればこそ、其處は佛天如來の世界でないか、業縁といふも佛天の御心ぢや。

迦葉　大王、世尊の御言葉が解りましたか、地上の人間としての卑少な心を、ふり棄て佛天の心に生きなさい、惱苦を離脱して救済をさへ無益となされませ。

阿闍世王、この刹那に正法を味得した歡喜に満ちたる面貌にて釋尊を仰ぐ、
釋尊　（黙して阿闍世王の得脱に微笑をもつて酬へてゐる）

耆婆　おう、醜草の伊蘭の種は匂はしき旃檀の花と化した。不思議でもない奇蹟でもない。

迦葉　（王に）大法の眞諦には、苦惱の底をくつた御身なればこそ、眞實に觸

れることが出來たのぢや。衆僧よ。大王の爲に祝福を。――

衆徒　（次の偈を合唱）

『月　清　淨　き　夜　や
樂　し　の　友　よ、來　れ。
煩　惱　の　汚　れ　を　離　れ
愛　欲　の　刺　な　く
廣　き　解　脱　に　生　死　の　縛　も　已　に　絶　え　ぬ。
有　漏　の　敵　を　拂　ひ
有　爲　の　境　も　今　は　越　え　ぬ
月　麗　し　き　夜　や
吾　が　友　よ、入　り　來　れ。』



大正十一年九月十五日印刷
大正十一年九月二十日發行

「悲憫王者」 定價金壹圓四拾錢

譯者 寺川 信

東京市麴町區飯田町二丁目二番地

發行所 株式會社 天佑社

電話九段長一一七三番
振替東京一〇一二八番

東京市小石川區諏訪町五番地

發行人 日岐久次郎

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者 檜山定吉

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社

ウエスターマー原著 (四六判洋装、細活字五五二頁)
島村民藏氏譯 (定價參圓貳拾錢、送料拾九錢)

人間結婚史

本書はロンドン大學の教授たりし原著者が、社會學、人類學、生物學等に關する該博の知識を傾倒して原始時代より今日に至る「人間結婚」の發達をあらゆる方面より觀察研究したもので男女關係の進化史であると同時に又東西を通じての兩性問題の變遷史である。「婦人が男子の情慾、偏見、及び利己心を漸次征服して行つた歴史である」と著者は總論して居る。

序論、研究の方法。第一章、結婚の起原。第二章、原始時代に於ける人間の春情期。第三章、人間結婚の古さ。第四章、亂婚の假設に關する批判(一)。第五章、同上(二)。第六章、同上(三)。第七章、結婚と獨身。第八章、人間の求婚。第九章、注意を求めめる手段。第十章、選擇の自由。第十一章、動物の雌雄淘汰及び典型美。第十三章、同類の牽引。第十四章、親族結婚の禁制(一)。第十五章、同上(二)。第十六章、愛情同情及び打算に影響されたる雌雄淘汰。第十七章、掠奪結婚と購買結婚。第十八章、購買結婚の衰頹と嫁資金。第十九章、結婚の儀式。第二十章、人間結婚の形式(一)。第二十一章、同上(二)。第二十二章、同上(三)。第二十三章、結婚の期間。第二十四章、總收。

ハヴロック・エリス原著
矢口達氏譯

性的心理大觀

有名なるハヴロック・エリスの原著で、性慾學の權威であることは知らぬ人は無からう。性は人生に横はる一大事實で性の問題は人生の中心問題である。之をいかに理解すべきかを知らぬ中は眞に人生を愛重するものとは云へない。本書は氏の三千頁の大作を上下二巻に縮譯したもので性問題に關する一切の問題を極めて嚴肅な科學的見地から説述して絶大な知識と教訓とを與へる。

上卷

(四六判細活字六三十頁箱入)
價貳圓七拾錢、送料拾七錢)

- 目次
第一編性的顛倒 第四編人類の性的淘汰
第二編性的衝動の解剖 第五編婦人の性慾衝動
第三編戀愛と苦痛

下卷

(四六判細活字六二四頁箱入)
價貳圓五拾錢、送料拾七錢)

- 目次
第一編色情象復 第三編妊娠の心的狀態
第二編弛緩の機構 第四編對社會の性問題

506
244

終

